過負荷（マイナス）の使い魔

下駄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
過負荷（マイナス）の使い魔

【Ｎコード】
Ｎ３３５５Ｘ

【作者名】
下駄

【あらすじ】
その日、ゼロと呼ばれた貴族の少女は平民を召喚した。
やはりゼロはゼロだったという嘲りと侮蔑を投げかけられ、少女は恥辱に震える。
しかし彼らは知らない。
しかし彼女は知らない。
少女が呼び出した少年は、ゼロの針を振り切った過負荷（マイナス）であることを。
貴族（エリート）達の支配する異世界にて、負完全を冠された凶人の新たな生活

と戦いが始まった――

ゼロの使い魔とめだかボックスのクロス小説で、主人公は我らが裸エプロン先輩、もとい球磨川禊さんです。

どちらかの作品しか設定を知らない人にも楽しんでもらえるよう頑張りつつも、基本まったり更新です。

後、活動報告にて執筆の裏話とか解説ｅｔｃやってます。（読まなくともストーリーに影響は出ません。そういうのに興味ある人向け）

第一敗『まるでファンタジーの世界だね』

澄んだ青の広がる空の下、桃色がかったブロンズの長髪を爆風で揺らす少女――ルイズは佇んでいる。

ここ、ハルケギニア大陸にあるトリステイン王国の魔法学院では、毎春行われている恒例行事ともいえる授業が催されていた。使い魔召喚の儀式である。

数々の生徒が召喚を成功させ、多種多様な動物やモンスターを己の使い魔としていく中、ただ一人ルイズだけが、未だ召喚の儀式を完遂できていなかった。

「やっぱりゼロのルイズは成功率ゼロだな！」

「召喚は爆発を起こす魔法じゃないぞー」

一度も魔法が成功したことがないがために、付けられた二つ名が『ゼロ』。トリステイン魔法学院きっての劣等生、それがルイズだった。

学院内どころか十六余年の人生においてルイズは唱えた全ての魔法を失敗してきたが、この召喚の儀式だけはできませんでしたでは済まされない。このままだと、最悪退学にもなりかねないためだ。

それだけに、ルイズはいつにもまして真剣だった。

されどその結果は伴わず、起きるのはいつもと同じ爆発ばかり。

幾度も自らが起こした爆風によってボロボロになりながらも、ルイズは諦めない。諦めきれない。

私だって誇り高き貴族でメイジなのよ！　そう己の内で唱え続けて、彼女はもう一度杖を振り上げ召喚のために叫ぶ。

「宇宙の果てのどこかにいる私の下僕よ！　神聖で、美しく、そして強力な使い魔よ！　私は心より、求め、訴えるわ！　我が導きに答えなさい！」

――爆発。

やっぱりゼロのルイズだと口々にヤジが飛び交うが、粉塵が晴れ

るにつれ、罵声は驚きに変わっていった。そこに何者かの影が見えたためだ。
「やった……！」
召喚の成功を確信し、思わずルイズは歓喜の声を上げた。
ゼロのルイズは初めて魔法を成功させたのだ、その喜びは格別のものだろう。
だが、
「え、そんな……嘘……」
つい数秒前まで歓喜に満ちていた幼くも美しい顔立ちは、あっという間に落胆の色に染まった。
原因はルイズが呼び出した使い魔にある。
幻獣や貴重なモンスターであったなら、ルイズの歓喜はさらに加速しただろう。いや、例え召喚されたのがそこらにいる小鳥や動物であったとしても、今のルイズなら悔しさより喜びがずっと勝ったはずだ。
「こ、こんなのが……神聖で、美しく……そして強力な……？」
ルイズの召喚よって現れたのは、黒く珍妙で皺と泥だらけの服を着た人間の男だった。歳はルイズよりいくつか上だろうが、大きくは変わらないだろう。
少年は気を失っているらしく、仰向けに倒れたまま動かない。
「おいおい、あれはどう見たって平民だぜ」
「ルイズ、『サモン・サーヴァント』で平民を呼び出してどうするの？」
ルイズが召喚したのは平民だったと皆が気付くやいなや、また人垣から嘲笑が再開された。
それに対しショックと失意で頭に血が上ったルイズは、勢いに任せて反論する。
「ちょ、ちょっと間違っただけよ！」
「間違いって、ルイズはいっつもそうじゃん！」
「さすがはゼロのルイズだ！」

ルイズが言い返しても、周りからの笑い声は大きくなるばかりだ。
これでは駄目だと、ルイズはこの授業を監督している教師に直接声をかける。
「ミスタ・コルベール」
「なんだね。ミス・ヴァリエール」
「もう一回、わたしに召喚をさせてください！」
生徒達の人垣を割って出てきたのは、生え際が後退しメガネをかけた中年の男性だ。彼は黒いローブに大きな杖を持ち、いかにも教師という風情を醸し出している。
ルイズはコルベールに再度召喚の儀式を要求するが、返された答えはノーだった。
「それは許可できない。ミス・ヴァリエール」
「どうしてですか！？」
「春の使い魔召喚は神聖な儀式ですぞ。二年生に進級する際、君達は『使い魔』を召喚する」
何とか食い下がろうとするルイズだが、コルベールはあくまで冷静に、一つずつ順を追うよう事情を説明していく。
「その『使い魔』の種類によってメイジとしての属性を固定し、今後は専門課程へと進むんだ。よって『使い魔』は一度召喚すると変更することはできない」
「でも！　平民を使い魔にするなんて聞いたことがありません！」
周りからはまたもどっと笑いが起きるも、そんなのを気にしている余裕はない。
使い魔召喚の儀式において召喚されるものは多岐に渡るが、ルイズが知る限り人間を召喚したなどという記録は一つもない。恐らくはルイズよりずっとメイジとしての経験の多いコルベールだって初めて見るだろう。
それでもコルベールの言は揺るがず、首を横に振るだけだ。
「それでもだ。この儀式のルールはあらゆるルールに優先する」
「そんな……」

「ミス・ヴァリエール、儀式の続きを」
これ以上食い下がっても無駄だと感じたルイズは、大きく肩を落として未だに眠ったままの使い魔に向き合った。
トリステインではあまり見ない黒髪でどことなく可愛らしい顔ではあるが、それらを除けば今ひとつ特徴に欠ける。
どうしてよりにもよってこんなのが召喚されてしまったの？　ゼロと呼ばれる自分には平民で十分だと、始祖ブリミルまでもがそう言っておられるの？
などと考えれば考えるだけ、ルイズの悲観は濃くなるばかりだ。
ルイズは諦観に任せて、儀式の仕上げを行う。
「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」
呪文を唱えてルイズは少年に口付けをした。
少女のキスシーンで、周りからはより一層声が上がる。それに比例してルイズの怒りは溜まる一方だが、相手が眠ったまま済ませられたのは彼女にとって不幸中の幸いだっただろう。
「『うぐ……！』」
少しの間を置き、使い魔のルーンが刻まれる痛みで、少年が覚醒した。
少年は上半身を起こして、呻き反射的に左手を抑えている。
突然痛みで目覚めたら、知らない場所に飛ばされているのだ。使い魔召喚の儀式のよって、自分が主人になったという事情説明は必要だろうと、ルイズは少年に声をかける。
「『ここは……』『安心院さんのいる教室じゃない？』」
「ここはトリステイン魔法学院よ」
「『トリステイン？』『それに君は……誰かな？』」
少年は上半身だけを起こしてキョロキョロと辺りを見回しつつ、ルイズの名前を聞く。どうやら目覚めたばかりもあり、現状の把握ができていないようだ。

「私はルイズ。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ。あんたは私の使い魔としてここに召喚されたの」
「『使い魔だって？』『それはまた随分とＲＰＧみたいな台詞だね』『括弧付けてるさすがの僕もビックリだよ』」
ＲＰＧとは何のことだろうか。そもそもこの平民は貴族に対してこんな口の聞き方がなってない。
どうにも噛み合わない会話にルイズはイラっとするも、その怒りが言葉として出るより先にコルベールが割り込んだ。
「ふむ、これは珍しい使い魔のルーンだな」
コルベールは手早く紙に少年のルーンを書き写して、生徒達に撤収を告げる。
「さてと、みんな教室に戻りますぞ」
そして皆が『フライ』の魔法で宙へ浮かび上がり、移動を開始する。その間にも「ルイズは歩いてこいよ」などと、生徒達によって彼女はからかわれていた。
「『あれは』『異常（アブノーマル）……ってわけでもなさそうだ』」
ルイズは教師と生徒が飛び去っていく中で、新たな不名誉となった自分の使い魔を見ると、少年はまた聞き覚えのない単語を呟いていた。
使い魔を見るたび、自分の悲運を始祖ブリミルに嘆きたくなるが、どうしようもなくこれが現実だ。それは受け入れなければならない。
「それで、あんた名前は？」
ルイズは事実を受容する一歩として、使い魔の名前を問うた。
少年は人懐っこく可愛らしいのに、どうしてか軽薄に感じる笑みをルイズへと向けて名乗る。
「『僕の名前は球磨川禊（くまがわみそぎ）だよ』『よろしくね、ルイズちゃん』」

第二敗『僕のいた世界には』

トリステイン魔法学院は全寮制のため、生徒ごとに部屋が割り当てられている。

ルイズは次の授業の前に、一先ず禊を自分の部屋に入れて待たせておくことにした。

禊にその場で状況説明をしたら時間がかかりそうだったし、何よりこのまま禊を連れるとなると、また他の生徒から馬鹿にされるのは目に見えていた。

どうせ明日からしばらくは、使い魔の顔見せをするために平民を授業へ連れていかねばならない。なら、せめて今日くらいは……という判断だ。

そして授業が終わり、ルイズが部屋に戻るとそこに禊の姿はなかった。

「何をやってんのよあの馬鹿！」

禊は口の聞き方に問題があったが、こっちの命令には素直だったので一応安心していた矢先にこれだ。

禊は部屋の鍵がどこにあるかも知らないため、ルイズが帰るまで鍵はかかってない。

召喚初日から鬱憤の溜まる使い魔である。

もしかしたら手洗いに行ったのかと数分は待ってみたが、帰ってくる気配はない。

使い魔の教育は最初が肝心だ。まず上下関係をしっかりさせるべきだろうと思い、ルイズは扉に鍵をかけると、勢い良くベッドに腰掛けて持ち込んだパンとワインで一人晩餐を始めた。

本来なら食堂でもっと豪華な食事を摂るのだが、禊に使い魔としての心得を叩きこむ時間を考えて、今日はこれにしたのである。肝心要の使い魔本人がいないのだけど。

そして使い魔が帰ってきたのは、ルイズが食事を終えた数十分後

だった。
「『ルイズちゃーん』『忠実なる使い魔が戻ったよー』」
軽く扉をノックして、禊が自らの帰還を告げる。だけどもルイズはそれを無視した。
返事がなければルイズが帰ってないものと思い、禊はそのまま扉を開けようとするだろう。
けれど実際には鍵がかかっており、ルイズは既に帰ってきているとわかる。
そうしたら禊は、より激しく自分が帰ったことを報告するだろう。それでもなおルイズが無視しようものなら、禊は廊下で眠るはめになる。
ルイズは、禊が必死に中へ入れてくださいと懇願する姿を思い浮かべ、ほくそ笑んだ。
使い魔が命令違反を大いに懺悔したところを、慈悲深い主人はもう二度と自分の意には逆らいませんと誓わせて、室内へと入れてやるつもりだった。
しかし、
「『やあ、ただいま』『僕だよ』」
「え？」
禊は何事もなかったかのように部屋へと入ってきた。ルイズの気分からすれば侵入してきたという感じだが。
呆気に取られているルイズに、禊はごく自然に語りかける。
「『本当にどこもかしこも胡散臭くて』『ファンタジー世界そのものだね！』」
何が胡散臭いのかルイズにはさっぱりわからないし、酷い言い草の割に禊本人はやたらと嬉しそうだ。
「あんた、どうやって部屋に入ったのよ？」
「『何の変哲もなく入ってくる姿を、堂々とひけらかしたけど？』」
「だって扉には鍵が……」
ルイズ自身がしっかりと覚えているため、鍵をかけたのは間違い

ない。
　外側から鍵を開けるには『アンロック』の魔法を使わないと無理だが、平民である禊にそれができるはずもないだろう。
　誰か代わりの者に『アンロック』かけてもらうにしても、禊以外に誰かがいる雰囲気ではなかった。
「『駄目じゃないかルイズちゃん』『戸締りはしっかりしておかないと』」
「あんたに言われたくないわよ！」
　だとしたら鍵が壊れてしまったのだろう。明日にでも至急新しい鍵を手配しなければ。と、ルイズは腑に落ちないながらも、最も考え得る可能性としてそう結論付けた。
「もういいわ。それよりあんた、ご主人様の命令を無視して、勝手にどこほっつき歩いてたのかしら？」
「『ファンタジー世界に迷い込んだら、まずは冒険してみなくちゃ』『ジャンプ読者としては当然の嗜みだよ』」
　わかりやすく意味不明だった。
　しかも話し方が一々馴れ馴れしいのがまたルイズの癇に触るのだが、何度注意しても改善の傾向は見られない。
「あんたねぇ、いい加減身分の差をわきまえなさいよ」
「『ルイズちゃんは今幾つなんだい？』」
「わたしは今年で十六歳よ。それが何か？」
「『敬語使えよルイズちゃん』『年上だぜ』」
　身分差より年齢を考慮し重んじる男だった。貴族相手にこれだけ慇懃な態度を示す平民は生まれて初めてだ。
「それはこっちの台詞よ！　あんた平民のくせに貴族を何だと思ってるわけ？」
「『僕はファンタジー作品ならドラゴンクエストが好きだけど』『嫁は町娘のビアンカ一択なのさ』」
　しょっちゅう会話が噛み合わなくなるが、これは禊がわざとやっているのだろうとは気付いている。突っ込むだけ無駄だと思っては

いるが、ずっと繰り返しているワードだけは何か意味があるのではないかと、ルイズは思った。
「さっきからファンタジーファンタジーって、どういう意味よ」
「『やだなぁ』『幻想って意味に決まってるじゃないか』」
「そうじゃなくて、どうして部屋の外が幻想になるのよ！」
いくら田舎から召喚された平民だからって、トリステイン魔法学院を幻想呼ばわりはしないだろう。
禊の使うファンタジーのニュアンスも、ありのままに幻想を指しているわけではなさそうだというのもある。
「『どうせ言っても信じないと思うけど、僕はルイズちゃんとは別の世界から来たんだよ』『つまり格好いい語感の互換で呼ぶと、異界人だね』」
「何を言ってるの？」
出会って初めて、使い魔とはぐらかしていない対話をした気がしたが、その回答は想像の斜め上をいっていた。
「『僕がいくら少年漫画大好きのアニメ脳だからってさー』『別世界に連れて来られたなんてにわかには信じられなかったよ』『作者の願望投影されまくったオリキャラが、最強設定与えられてアニメ世界へトリップする小説じゃないんだから』」
「……本当に何を言ってるのよ」
前半はともかく後半は完全に意味不明だった。だけど禊が、ハルケギニアではない全く別の世界からはるばる召喚されてきたと主張してるのは把握できた。そんな馬鹿な。
「別の世界って、どんな世界なの？」
「『夢と希望が現実に押し潰された、地球と呼ばれる世界かな』」
「わたしにわかるよう言いなさい」
「『魔法なんて、お伽話と三十歳を過ぎた童貞くらいしか存在しなかったよ』」
「『それに……』」と、禊はルイズをはっきり意識しながら、視線を窓へ向ける。

「『僕のいた世界には』『空に輝く月は一つしかないぜ』」
ハルケギニアから眺める空には、大きな青い月と、その左に小さな赤い月が寄り添うように並んでいる。ルイズからしてみれば、それ以外の夜空なんて空想したこともなかった。
「信じられない。魔法がない世界なんて、想像もできないわ」
「『世界の異物として扱われるのは、地球でも同じだったから気にしないけどね』『一つ教えてもらってもいいかな？』」
「何よ？」
「『召喚した使い魔を送還する魔法はあるのかい？』」
「そんなのないわよ。大体、別の世界なんて聞いたことがないもの」
「『やれやれ、無責任は過負荷（マイナス）の専売特許だぜ』『特許料払えよ』」
そんなの知らないわよ。とルイズは思うが、それでも召喚魔法については説明してやることにした。
「召喚の魔法、つまり『サモン・サーヴァント』は、ハルケギニアの生き物を呼び出すのよ。普通は動物や幻獣なんだけどね。人間が召喚されるなんて初めて見たわ」
「『そいつは困ったね』『いや本当に』『僕には元の世界でやることがあるんだよ』」
「わたしだって好きであんたなんて呼びたくなかったわよ！」
ルイズがそう怒鳴って返すと、不意に襖の雰囲気が変わった。
「『自分の都合だけ押し付けて、こっちは知ったこっちゃないか』『ホント、ルイズちゃんはいいご身分（きぞく）だねえ』」
「う……」
同じ笑顔なのに、重くて、想い。ルイズの背筋に大量の虫が這いずるような悪寒が走る。
吐き気を催す程に、キモチワルイ。
だけどそれはものの数秒で、襖はすぐいつもの調子に戻った。
「『とは言え、戻り方がわからないんじゃ仕方ない』『怒江ちゃんや飛沫ちゃん、蛾々丸ちゃん達には申し訳ないけど』『しばらくは僕抜きで頑張ってもらおう』」

――い、今のは何だったの！？

ドクンドクンと高まる鼓動を抑えつけるように、右手を広げ胸に当てた。

「『というか、一番過負荷（マイナス）な僕がいない方が勝ちやすかったりしてね』『ん、どうしたのルイズちゃん？　何か気持ち悪い僕（もの）でも見ちゃった？』」

禊の挑発に、ルイズは自分が気圧されたことを悟らせように佇まいを直した。そうすることにより、かえって弱気を隠していると読まれてやすくなってしまうのだが、それに気付く冷静さは失っている。

「『そういうわけで』『これからも仲良く、ベストパートナーでいようね』」

「どういう意味よ？」

「『ルイズちゃんが僕を身勝手に召喚したくせして帰せない』『そんな良心の呵責に責められないよう、ルイズちゃんの使い魔になってあげるよ』」

明るく朗らかに、そして何より下から見下したような尊大さだった。

そんなわけのわからない矛盾を成立させてしまうのが、禊という男なようだ。

それに対しルイズは、使い魔にならせてくださいでしょ。とは言えなかった。

「……そう」

消極的な肯定をこぼして、曖昧なままに禊の申し出を受け入れた。まださっきの震えから立ち直れていないため、強気に出られないのだ。

そんなルイズを気にも留めず、禊は次の質問を投げかける。

「『ねえねえ』『使い魔って具体的にはどんな恩恵を受けられるの？』」

「逆！　普通その質問逆でしょ！？」

これには思わず、ルイズも正面きってツッコミを入れた。
たとえ禊が本当に別世界から来た住人であるとしても、これまでの会話から使い魔がどう言った存在であるか、大まかにはわかっているはずだ。その上で自分の権利だけを主張してきた。ルイズでなくたって呆れるに決まっている。
「使い魔は主人と一心同体となって仕えるのよ！　まず、主人の目となり、耳となる能力を与えられるわ」
「『ルイズちゃんは、どうしても僕から人間の尊厳を奪いたいようだね』」
「安心していいわ。何も見えないし、聞こえないもん」
尊厳を奪うというフレーズで、また禊が妙な気配を撒き散らすかと肩をびくつかせたが、どうやら杞憂だったようだ。何が引き金なのかわからないのも性質が悪い。
「それから、使い魔は主人の望むものを見つけてくるのよ。例えば秘薬とかね」
「『秘薬っていうと、惚れ薬とか？』」
「それはマジックアイテム、しかもご禁制のよ。秘薬っていうのは特定の魔法を使用する触媒で、硫黄とかコケ……」
「『アイテム探しの依頼はＲＰＧじゃお約束のイベントだね！』」
ルイズはまだ短い会話歴から推測して、禊がＲＰＧとかファンタジーという単語を持ち出す時は、そんなの自分の世界では知らないと告げているのと同義だと学んだ。
「そしてこれは一番大事なんだけど……、使い魔は主人を守る存在であるのよ！　その能力で主人を敵から守るのが一番の役目！　でも、あんたじゃ無理ね……」
『僕は生まれてこの方誰にも勝ったことがないのが劣等感（じまん）だよ！』
「最悪じゃない！」
この使い魔、飄々とした態度しているけど、能力面は並の平民より酷かった。その事実がまたルイズを精神的に追い詰める。
「あんたにやらせてあげるのは掃除と雑用。その代わりこっちは衣

食住を保証するんだから」

「『謹んで、そのいっちょ前なギブアンドテイク宣言をお受けするよ』『ご主人様』」

「その承り方のどこに謹みがあるのよ……。もう、今日は疲れたから寝るわ」

主に精神面で疲弊しまくった一日だった。元々順風満帆な学院生活とは言い難いが、これではさらに先が思いやられる。

「『ルイズちゃん』『それじゃあ保証された僕の寝床はどこになるのかな？』」

「あんたは床よ」

ルイズは自分の足元を指指して、毛布を投げ渡した。

禊は案外大人しく毛布を受け取ると、床に寝そべって丸くなる。

「『うん、ま、年上の余裕で許してあげるよ』『理不尽な待遇には慣れているし、実際僕も疲れてるからね』」

ルイズは、自分に背を向けた禊に脱いだ衣服を放った。

上半身だけを起こした禊が、レース付きのキャミソールと白いパンティーを確認して固まる。

「それ、明日になったら洗濯しといて」

「『仕方ないね！』『これも使い魔の仕事だからね！』『じゃあ明日の仕事の忘れないように、今日はこれをしっかりと握り締めながら眠るとするよ！』『るんるん！』」

「やめなさい！」

るんるんまで口で言って、禊はまた毛布に潜ろうとした。通常、平民の使い魔なんかに下着や裸で恥じらいを覚えたりはしないが、こうまで露骨に変態宣言をされたら別だ。

下着を禊から少し離れた位置に置かせて、ようやくルイズはベッドに体を横たえた。

指を弾いてランプを消して、夜の闇に抱かれる。

ルイズの初めて成功した魔法は、彼女のゼロというコンプレックスを回復させるには至らなかった。魔法が上手くいったのに、この

結果はどうなんだ。
人生で一度も勝ったことがないと、あの使い魔は言った。
それはまるでまともに魔法が唱えられた試しのない自分と同じではないか。
自分に相応しい使い魔。
勝利なき使い魔。
ゼロの――
二人の部屋で独りになったルイズの頬に、一筋の雫が伝う。
ゼロという蔑称にも絶対に認めはしないが、慣れていた。それなのに、どういうわけか今日は心が耐え切れない。
悔しかった。
どれだけ努力を重ねて、いい成績を残しても、魔法が使えないという一点で自分を認めてくれない周囲が。そんな評価を覆せない弱い自分が。
これからも自分はそうなのだろうか？
失敗し、嘲りと侮蔑を込められゼロと呼ばれ続けて、そのままで一生を終える。
――勝利のない使い魔を呼んだ私は、つまり、そういうことなの？
夜中より暗い、心の闇に希望を喰らわれるような絶望に苛まれながら、ルイズは徐々に眠りへ就いたのだった。

第三敗『少年漫画の主人公だったら』

ルイズの衣服、特にショーツをがっちりと掴んで学院内を自由に彷徨(さまよ)い歩く禊は、自分がここに召喚される直前の出来事を思い返していた。

それは七月二十八日、箱庭学園で行われた行事である生徒会戦挙庶務戦での出来事。

夏休みに入った学園のグラウンドには十メートルにきっちりと図られた立方形の大穴が開けられ、その上には金網を乗せている。ただし金網はポールにはめ込んだだけで固定されていない。そして地の底は、あろうことか猛毒で知られるハブで埋め尽くされていた。

その上で学生二人が決闘をしていたのだ。

禊の対戦相手である、跳ねっけの強いオレンジがかった茶髪をした少年、人吉善吉(ひとよしぜんきち)は、禊の策略により視力を失わされて心を折られかけた。

それでも善吉は残る力と精神を振り絞った震脚によって、金網を地の底に到達させた。

これによって毒蛇の群れは二人を襲う。善吉は自分の命を引き換えにし、禊を死の間際にまで追い込んだのだ。

今の禊にとって死は人生の終点に成り得ないのだが、善吉の思わぬ反撃によって彼が焦らされたのは事実であり、禊は地の底で苦言を零した。

「『僕が少年漫画の主人公だったら』『ここでまさかの逆転劇が起きるのに……』」

むしろそれを起こしたのは善吉であり、逆転された悪役こそが禊だった。

ハブの毒が全身に回っていく激痛で、禊は崩れ落ちる。

痛みに耐え切れず仰向けに倒れていく禊は、その落下地点で待ち受けているハブを予想して首だけを後ろへ向けた。けれどもそこに

は蛇なんて一匹もいない。
その代わりに、彼のまるで予想だにしない物が待ち構えていた。
「『え？』『これは、鏡？』『どうしてこんな物が――』」
善吉との激闘や蛇に絡まれることによって、禊は泥に塗れ傷だらけになりながら、鏡に吸い込まれるように、地球から喪失した。
「『そして僕はルイズちゃんに召喚され』『意識を失ってた間に隷属契約を結ばされ現在に至る』『ってわけだね』」
他人からの迫害には慣れている禊だが、ここまで人権をダストシュートに投げ捨てた仕打ちを受けたのは久しぶりである。しかも、契約の結び方がキスだと知らないままそのシーンが終わってしまったのも、過負荷（マイナス）たる禊が故だったのだろう。
禊が目覚めた時、身体の傷やハブの毒は消え去っていた。それはただ単に、禊の保有するスキルが自動発動しただけの可能性が最も高い。
禊は死ぬと必ず夢で安心院（あじむ）なじみという少女と邂逅するのだが、けれど今回に限ってそれがなかった。
だとしたら、もしかしたら禊はあの時死なずに済んでいて、召喚魔法の効果によって命を助けられたのかもと考えられなくもない。
どちらにせよ、自らが保有するスキルによって死が大した意味を持てなくなっている禊は、それを恩義として感じることはなかった。
そのために昨日は部屋で待機していろという命令も無視して、ここはどこなのか、そもそも何らかの異常（アブノーマル）によって幻覚に囚われているのかもしれない。などの疑問を解消するため、時間をかけて学院内を探索していたのだ。
今だって禊が使い魔となって大人しくルイズの命令に従っているのは、異世界の情報を仕入れるためと、合法的に美少女の下着を触れるためである。意外と、健康的な男子としての道は踏み外していない禊だった。
ともあれ、禊の目的はあくまで帰る方法を見つけることだ。それも早急に。

もし禊がここに召喚された時期が、他の箱庭学園以外の学校を廃校にして回っていた頃なら、さほど焦りもしなかっただろう。どちらかというと、少年の夢である異世界旅行にはしゃいで、お上りさん気分でトリステイン魔法学院を廃校させていたかもしれない。常人なら気が触れたかと思う事態であっても、過負荷（マイナス）と普通（ノーマル）では、理不尽への耐性が違うのだ。

「『次の戦挙までには』『ひのきの棒とおなべのフタを装備して、箱庭学園に帰らないと』」

しかし、今の禊には共に戦う過負荷達（なかま）がいる。守るべき過負荷（じゃくしゃ）がいる。共に堕落したい過負荷（とも）を見捨てる選択肢など、ぬるい友情を掲げる彼には有り得ない。

昨日の夜、禊が危うくルイズをご臨終様展開に持って行きかけたのは、自分が呼ばれたことによる仲間達への心配を踏みにじるような発言が元だった。

ただ、不幸（マイナス）中の幸い（プラス）として、禊の帰還についてルイズは反対の意を示さなかったため、その点については協力も仰げるだろう。

「『それにしても』『洗い場、洗濯板、石鹸』『わからないなら誰に聞けばいいか』『何一つとして説明せずにベッドでしくしく泣かれるとは予想外だったよ』」

ベッドで嗚咽を漏らすルイズを見てみぬふりをする優しさが、まだ禊にも残っていた。わけがなく、貴族（エリート）が平民（ハズレ）を引き当てた絶望感をよく噛み締める時間をプレゼントしただけである。ルイズがひとしきり泣いた後で声をかけ、余計羞恥に塗れされようとも思ったのだが、禊が先に寝てしまったのだ。

そもそも禊が出歩いているのは洗濯のためではない。衣服の汚れなんて禊のスキルでどうとでもできる。

ただそれっぽい姿を見せず清潔になった下着だけを渡したなら、どうやったのか問い詰められるだろうから、時間潰しに朝の散歩をしているだけだった。

自分のスキルを教えるのに抵抗があるわけではなく、そういうショータイムはタイミングを大事にするのが、劇場型で人の注目を好む禊の流儀である。
「あのー」
「『うん？』」
せっかくだし、切り上げた散策の続きでもしようかと思っていた禊は、何気なく背後から声をかけられ振り向いた。
そこには、短めの黒髪をしたメイド少女が洗濯物を籠に入れて立っていた。素朴な可愛さで、貴族よりも生活感のある少女だ。
「『話しかけると』『“ここはトリステイン魔法学院です”と言う役が似合いそうな子だな』」
どうやら禊は、ハルケギニアにいる間はとことんＲＰＧネタを使い倒すつもりのようだった。
「はい？」
何が何やらわからないままに、メイド少女は小首を傾げる。どうやら早々に解釈を諦めたルイズと違って、どうにか意味を理解しようとしているようだ。
「『こっちの話だから気にしないでいいよ』『それで、僕なんかに何の用かな？』」
「あ、はい。あなたは、ミス・ヴァリエールの使い魔になったという、噂の方ですか？」
「『そうだよ』『僕が噂の真相、球磨川禊でーす！』」
禊があざとくも人のよさそうな笑みで少女に応えた。すると、少女も笑顔で自己紹介を返した。わざとらしさのない自然な笑みだ。
「私はシエスタって言います。それで、もしかしてお洗濯に行かれる途中ですか？」
「『正解正解、拍手ー』『よくわかったね』」
「貴族様の下着を持っているようだったので、もしかしてお洗濯できる場所を探してるのかなって」

「『うん、実はそうなんだよ』『僕のご主人様は、使い魔使いが荒くってねー』」

いくつか、事実との相違があるが禊は黙っておいた。説明するのが面倒だし、ここも手品の種明かしをするタイミングであるはずはない。

「それなら、私もこれからお洗濯をするつもりだったので、一緒にご案内しますよ」

「『ありがとう』『そうしてくれると助かるよ』」

珍しくも普通の接し方で、禊はシエスタの後ろを付いていく。

禊のひねくれた話術も、気立てのいいシエスタはにこやかさを崩さない。尤も、これは禊の主義も少なからず関わっているのだが、シエスタは貴重な情報源となっていた。

「召喚の魔法で平民を呼ばれたと聞いた時は驚きましたわ」

「『たった一日で学院中に話が広がってるんだ』『閉鎖空間だけあって、情報の伝達は早いようだね』」

その事実が意味するのは、平民側のルートでもそれなりの情報収集は期待できるということである。

しかし、実益を兼ねた和む世間話も長くは続かなかった。会話に気を取られていたシエスタが、角を曲がってきた者とぶつかったのだ。

「あっ！」

「きゃあ」

これは禊がタイミング悪く話しかけて起こったミスであり、洗濯物を持っていたため動きが鈍っていたのも運がなかった。

相手の少女も不意打ちだったらしく後ろによろめいたが、寄り添っていたもう一人の少年がそれを支える。

男女の二人組はそれぞれマントを羽織っており、少年が黒で、少女が茶色だ。どちらも高貴な身なりであり、一目見ただけで貴族であるとわかる。

シエスタも倒れることはなかったが、手に持っていた籠を手放し

てしまった。
　中身の洗濯物ごとひっくり返ったため衣服達はぶつかった少女に振りかかり、被害者の貴族は憤慨を隠そうともせずシエスタに食ってかかる。
「もう、何なの！」
「申し訳ありません！」
　それを見たシエスタは顔を青白くさせ、深々とお辞儀し謝罪した。その様子は完全に萎縮していて、狼狽し震え上がっている。
「大丈夫かい、ケティー？　やれやれ、君のせいで美しい薔薇が汚れてしまったじゃないか。どうしてくれるのかな？」
　少年はケティーと呼んだ少女から洗濯物を剥がす。それからキザったらしく自らの金髪をかき上げて、手に持った薔薇を嗅ぐようなポーズを取る。
　それを見たシエスタは涙目になって、より激しく頭を下げる。
「申し訳ありません！　お許しを！　申し訳ありませんでした！」
　シエスタからさっきまでの明朗さはすっかり消え去っており、何度も何度も、ひたすらに謝り続けた。まるでそうするための人形になったようだ。非はシエスタにあるとはいえ、その姿からは惨めさが漂っている。
「せっかくギーシュ様と二人で朝のお散歩をしていたのに、台無しになってしまったわ。これだから下賤な平民は嫌なのよ」
「どうにも不躾なメイドだね。これは罰が必要かもしれないね」
　何を言われても、シエスタは申し訳ありませんを繰り返す。ワンパターンと言うよりは、あまりの畏怖からパニックを起こして、それしかできなくなっているのだろう。
　やがて「もういいわ。こんなひたすら謝るだけしか能のないメイドなんて放っておきましょ」と、貴族の二人が呆れて去っていくまで、シエスタの頭は上がることはなかった。
　なんとかその場を取り繕ったシエスタは、二人が見えなくなると糸が切れたように、その場に座り込んだ。余程恐かったらしい。

その顔には涙と罰を与えられなかった安心感がありありと見て取れた。

また、シエスタの隣に立っていた禊は一連のやりとりをじっと眺めていただけで、去りゆく二人をただ見送った。

ただし、その濁りなき瞳に、貴族と平民にある明確な格差をしっかり網膜に焼き付けて。

第四敗『なんてことを言うんだ』

気落ちしながら眠りに落ちたルイズは、寝覚めの悪い朝を迎えていた。

ルイズが薄らぼんやりした意識で周囲を見回す。

すると見慣れぬ毛布の塊があり、自分が平民を召喚したことを思い出すが、そこに襤の姿はない。

またぞろ使い魔が勝手に行動しているという事実を確認したら、怒りで目が冴えてきた。

「どうしてご主人様を起こしもせず、部屋からいなくなるのよ！」

なんて喚いてみても、昨日の夜と同じく当事者がいないのだから意味はなかった。

時計を観るとちょっと寝過ごし気味ではあるが、まだ朝食の時間には間に合う。

ルイズは焦りつつもテキパキと着替えて部屋を飛び出すと、丁度部屋に戻ろうとしていた襤とばったり出くわした。

「『やあ、おはようルイズちゃん』『今朝はゆっくりだね』」

「あんたのせいでしょうが！」

「『んん？』『僕はご主人様を起こすようにとは仰せつかってないよ』」

「身の回りの世話は全部あんたの仕事なの！　ちゃんとご主人様を起こしなさい！　というか何また勝手にうろちょろしてるのよ！」

得体のしれない昨日の恐怖は、起き抜けからのストレスで喉元を過ぎ去ったらしく、ルイズは朝からまくし立てる。

「『ヒステリックご主人様が、常に素肌に密着させてないと気が気じゃないアレを』『甲斐甲斐しく洗浄しに行ってたのさ』」

「どういう表現よそれは！」

ただの洗濯で、どうしてこんな如何わしい話になるのだ。意味もわからず自分がはしたない女みたいな扱いを受けて、ルイズはさら

に激昂する。
「あら、おはようルイズ。朝から騒がしいわね」
「……おはよう。キュルケ」
ルイズと襖が廊下で騒いでいると、隣の部屋から新たな少女が現れた。燃え盛るような赤の髪に褐色の肌をしており、背も高い。ルイズが年齢より少々幼く見える体型に比べて、キュルケはメリハリのある体つきであり、ブラウスのボタン上二つを外して豊満なバストを強調している。
そんなお隣さんの登場に、ルイズは顔をしかめて挨拶した。
「そこにいる影の薄そうな顔した平民が、あなたの使い魔？」
「そうよ」
「あっはっは！　『サモン・サーヴァント』で平民を喚んだとうのは本当だったのね！　さすがはゼロのルイズ」
高らかに笑うキュルケに、ルイズは悔しがる。それでも事実は事実であり、まともに返せる言葉もない。
「う、うるさいわね！」
「『それで』『これがキュルケちゃんの使い魔かな？』」
二人が話している間に、キュルケの部屋の前にしゃがみ込んでいた襖は、そこでじっといる赤いトカゲに傾注していた。
「随分と馴々しいわね、あなたの使い魔」
「そういう奴なのよ」
「ふーん、まあいいわ。そうよ、この子が私の使い魔フレイム。誰かさんとは違って一発で成功よ」
「『尻尾が燃えてるね』『ポケモンには見えないし、ＲＰＧ的にサラマンダーってところかな』」
襖は火トカゲを見るのは初めてのようだが、大型の四足獣サイズのモンスターに物怖じせず、興味津々といった様子で眺めている。その感嘆するような姿勢で上機嫌になったのか、キュルケのお喋りが饒舌さを増した。
「この尻尾、ここまで鮮やかで大きな炎は、間違いなく火竜山脈の

サラマンダー！　好事家に見せたら値段なんか付かないブランドものよ！」

『故郷（くに）へ帰るんだな。お前にも家族がいるだろう』

禊がフレイムの頭を撫でながらポツリと呟いた。ルイズはそれが強制的に召喚された禊の皮肉だと解釈し、キュルケは彼なりのジョークだと思っているようだ。

「ふふ、面白い子ね。それであなた、お名前は？」

「『僕は球磨川禊だよ』『よろしくね』」

「クマガワミソギ？　変な名前。けどあなた、よく見ると可愛い顔だし、私のところにいらっしゃいな。特別に使用人として使ってあげるわよ？」

「『ありがとう』『前向きに検討しておくよ』」

「何ご主人様を差し置いて勝手な話をしてるのよ！」

キュルケの行為はあくまでルイズを挑発するためで、本気さは欠片も感じられなかった。所詮、平民は平民という扱いだ。

それはわかっていても、ルイズには禊が嬉しそうにキュルケの誘いを受けようとするように見えたらしい。禊の表情筋は、だいたい笑顔で固定されているのだが。

「あら、恐い。それじゃ、お先に失礼」

キュルケを見送ったルイズは、彼女の背が見えなくなってから我慢していた本音を、腹の底から吐き出す。

「ああもう、悔しー！　なんなのあの女！」

ハルケギニアには、“メイジの実力を量るには使い魔を見ろ”という言葉がある。

それに従うならば、ルイズはやはり自他共に認めるゼロの資質を表す者を引き当ててしまった。それに比べてキュルケは、

「自分がレアな火竜山脈のサラマンダーを召喚したからって自慢して！」

この格差はなんなのよ！　っと、もう朝から不機嫌が止まらないルイズである。

「『ルイズちゃんは、余程あの子と仲がいいみたいだね』」
誰が見ても炎上中のルイズに、禊はためらいなく油を注いだ。火勢を増したルイズの矛先は禊に方向転換される。
「どうやったらそういう結論に達するの！」
「『僕の世界にはツンデレという言葉があってだね』」
「もっと腹が立ちそうだから、あえて意味は聞かないわ」
「『それは残念だよ』」と言う禊には、悔しさなど微塵も見えやしなかった。
『ところでルイズちゃん』
「何よ？」
「『“ゼロ”っていうのはルイズちゃんの二つ名みたいだけど』『どういう意味なのかな？』」
「つ、使い魔はそんなこと知らなくていいの！　それより、早く食堂に行くわよ。グズグズしない！」
ただでさえ禊はルイズをご主人様と認めているとは思えない接し方をしているのに、魔法が使えないからゼロという蔑称を与えられている、なんてこと話せるわけもない。
ルイズは無理があると思いつつも、そこで強制的に話を打ち切り、扉に鍵をかける。
「あれ？」
すると鍵はきちんとかかり、扉は開かなくなった。そんなのは当然の事象であり、だけどルイズにとっては不可解な現象だ。
「だって昨日は……」
鍵が壊れてちゃんとかかっていなかったはず。それを忘れていて鍵をかけてしまったのだが、今鍵はしっかりとかかっている。
「『ルイズちゃん』『どうかしたかい？』」
「あんた……いえ、なんでもないわ。行きましょう」
どうして昨日は壊れていた扉の鍵が直っているのか。何かを仕組んだのだとしたら、犯人は禊以外に誰がいるというのだ。
しかし、昨日は知らぬ存ぜぬを押し通した禊が、今日になって何

かを吐くとは思えない。
そんなこともわからないのかと言外に揶揄されるのが嫌で、これ以上の追求はやめておいた。
それに食堂にさえ行けば、こちらには立場逆転の秘策が用意されている。ここまで自由に振る舞い続ける禊に、ようやく効果的な躾ができるのだ。
ルイズはこの先にある自分の計画を思い、内心で黒い喜びを宿して、禊に背を向けて歩き出した。

●

魔法学院の中心に位置する本塔に、“アルヴィールズの食堂”はある。壁際に並ぶ、夜になると踊り出す人形達がその名の由来だ。
学園内の貴族達は皆、ここで食事をする。三つ並んだ長いテーブルは全てに豪奢な装飾が施されており、一つにつき裕に百人は座れるだろう。
その中で、二年生のルイズは真ん中に座ることになっている。
「気の利かない使い魔ね、早く椅子を引いてちょだい。って、何勝手に座ってるのよ！」
「『これは失礼』」
ルイズが平民を連れて入室し、それを笑った者達を目で威嚇した僅かな時間で、禊は椅子に座って料理を眺めていた。どれだけがっついているのだ、この使い魔。
――ここは堪らえなさい、ミス・ヴァリエール。こいつが朝食に興味を示すのはいい兆候よ。
ルイズの椅子を引くために禊が立ち上がると、ルイズはそのまま禊だった席を奪ってしまった。
「『貴族様は朝からヘビー級の食事をするみたいだね』」
そんなルイズを気にした風もなく、禊は隣の椅子の背を掴むが、ルイズにその手を払われる。

ここでようやく禊がルイズに視線を送るが、今度はルイズが禊の目を見ず、澄ました顔をして床を指さす。
「あんたは床」
「『その床にある皿が、僕の食事ってことかな？』」
「そうよ」
ルイズが肯定した皿には小さな肉の切れ端が浮いたスープに、硬そうなパンが二切れ添えられている、だけだった。
これは屈辱的だろう。しかも禊はルイズ以外からは食事を得る手段がないのだ。
「いいこと？　使い魔は外で食事するのを、あんたは私の特別な計らいでここに居られてるの」
「『そんな！』『なんてことを言うんだルイズちゃん……！』」
ルイズは使い魔を召喚してから始めて、彼の非難の声を聞いた。ようやく自分が主人として立つべき優位に立ったと、ルイズがほくそ笑む。
「あら、それが嫌ならあんたも他の使い魔達と一緒に外で食べれば？」
「『当然じゃないか！』」
「はあ？」
「『いくら自分の使い魔が可愛くてしょうがないからって、そんな差別はいけないよ』『いたんだよねー僕の世界にも』『ペット持込み禁止の店に家族だからと犬や猫を連れ込む常識のない人が』」
怒られている。けれどもそれは、床で粗食を食べさせられるという屈辱ではなく、使い魔を食堂に連れ込んでいるルイズの行為をだ。わけがわからず、ルイズの思考が一時ストップする。
「『そういうわけで、僕も外で食べてくるね』『それじゃ！』」
「え、あ、ちょっと待ちなさい！」
まるで想定の外な怒りの矛先にルイズが混乱していると、禊は自分の皿を持って立ち上がり、さっさと食堂から出て行ってしまった。
またしてやられたと、ルイズが気付いた頃にはもう遅い。追いか

けて文句を言おうにも、もうすぐ食事前のお祈りが始まる。
貴族として礼節を重んじるルイズは、後で覚えてなさいと怒りを胸に押し込めて、姿勢を正す。
そして気付いた。
「え？　嘘……」
料理がない。
それもルイズの料理だけが綺麗さっぱり消えている。まるで始めから何も入ってなかったみたいに、スープの一滴も残ってはいなかった。
いつ、誰が？　そんなのまた禊がやったに決まってる。こっちの気を引かせたのはそのためだったのだ。でも、どうやって？
わからない。わかるはずがない。だって禊は、メイジじゃないから。
「本当にあの使い魔は……」
空腹。疑念。そして昨日の恐怖と会話が連なり、禊の語っていた話を思い出す。
異世界からやってきた平民。そんな馬鹿なと思っていた事柄が徐々に現実味を帯びて、ルイズに不安感を喚起させる。
「そんなわけないわ。異世界なんて」
これはマジックアイテムの仕業だ。そうに決まってる。馬鹿な空想よりも、あり得る現実に目をこらすべきだ。
そうやって異世界という未知の存在を否定する。
しかしそれと同時に、私は一体“何”を召喚したのだろう。そんな不確かであるのに確定的な得体の知れなさが増していくのを、ルイズは感じていた。

第五敗『忠実な使い魔だからね』

ルイズはお祈りが終わってもしばらくはじっとテーブルに座っていた。周りが食事のないルイズの皿を見て怪訝そうにしているが、全部無視だ。

やがて大きな溜息を一つ吐いて、ルイズは食堂を出た。すると、ルイズを待っていたのだろう禊が寄ってくる。

「『食事美味しかったよ』『ありがとう、ご主人様』」

「どどど、どういたしまして。あ、あんたこそ、自分から外で食事するなんて、立場がわかってきたじゃない」

「『そりゃあそうさ。なんたって僕はご主人様の忠実な使い魔だからね』」

なんて白々しい虚勢だろうと、ルイズは自嘲した。

一見すると忠誠を誓う従者とその主人の会話だが、その本質はまるで逆。主人が無理に澄ました顔で虚勢を張り、内情を知る使い魔が心の底でニヤニヤ笑ってそれに付き合っている。

最悪じゃないか。才能ゼロで平民の使い魔を召喚して、その使い魔をコントロールする能力すらゼロなのだから。

「『それにしても』『ルイズちゃんは食べるのが早いんだね』」

「それはあんたがっ！」

「『おやおやー？』『急にしかめ面になって、早食いし過ぎてお腹痛くなっちゃったかな？』」

「……そ、そうかもしれないわね。けど大したことないから大丈夫よ」

堪えろ。これは禊の策略であり、こっちが言い返せば言い返すだけ禊は調子に乗るのだ。

「教室に行くわ！」

「『はーい』『ご主人様』」

●

魔法学院の教室は三方向に広がるように机が設置され、その集約地点に教師用の教壇と黒板がある。

その机に座るのは一人で、教室はまだがらんどうだった。

いつもより早く教室にやってきたルイズは、空腹を堪えつつ黙々と予習をしている。

禊は興味の赴くままに教室をウロウロしているようだ。ルイズからすれば変にちょっかいをかけられるより気が楽なので、好きにさせて放置している。

やがて他の生徒達もやってきて、禊の関心は生徒の使い魔に移っていった。しげしげと使い魔達を観察する禊を、ある者は疎んじて、またある者は見下げて笑う。そのどちらにも、禊は同じ笑みで応えた。

「『本当に多種多様な種族がいるね』『二足歩行（にんげん）する哺乳類は僕だけだけど』」

一通り生徒が揃って教室のざわめきが大きくなってくると、禊がルイズの隣にやってきた。ルイズは使い魔が座る椅子はないと、口を開きかけたが、禊が座ったのは椅子ではなくて床だ。先読みされている。

「昨日言ったでしょ、人間なんて召喚された記録はないの」

「『僕を除いて……ね』『ルイズちゃんはスゴイじゃない』『君は前例にないことをやったんだぜ？』」

それが人間召喚なんて、ある意味大失敗に等しい前例でなければね。ルイズは自虐と八つ当たりを喉元で抑えた。

堪えろ。堪えろ。堪えろ。三回唱えて前を向く。

油断するとすぐにペースを持っていかれてしまう。こんなタイプを相手にするのは初めてだった。

「『バックベアード様もいたね』『僕はロリコンじゃないから、怒られずに済んでよかったよ』『瞳先生は例外だしね……』『ホント

に例外なんだよ？』」

また意味不明な発言をしているが、それも無視しておく。

そうこうしていると教室の戸が開き、中年の女性が入ってきた教壇に立った。ふくよかな体型で、ゆったりめな紫のローブと、帽子を被っている。

「『あのいかにもって人が先生かな』」

「当たり前じゃない」

このタイミングで教室に入り教壇までやって来て、まるで部外者なわけがないだろう。

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですね。このシュヴルーズ、こうやって春の新学期に、様々な使い魔達を見るのがとても楽しみなのですよ」

何気ない言葉の連なりだが、ルイズにとっては今最も触れて欲しくない話題の最上位であり、思わず俯いてしまった。

そこに、悪意のない追撃がやってくる。

「おやおや。変わった使い魔を召喚したものですね。ミス・ヴァリエール」

それが引き金となって、教室が笑いで溢れかえった。不快な声が束になってルイズを叩く。

「ゼロのルイズ！　召喚できないからって、その辺歩いてた平民を連れてくるなよ」

その嫌味を受けて、ルイズがたまらず立ち上がる。召喚したのも認めたくないが、召喚失敗と言われるのはもっと許せなかった。

「違うわ！　きちんと召喚したもの！　この傍若無人な平民が来ちゃっただけよ！」

「嘘吐くな！　『サモン・サーヴァント』ができなかったんだろう？」

――あんたはこんな貴族を貴族として扱わない特異な平民がその辺にいると思うの？

こんなのは言うだけ無駄だ。だって、誰もこいつがどれだけ変な

平民なのか、まるでわかっていないから。
「ミセス・シュヴルーズ！　侮辱されました！　かぜっぴきのマリコルヌがわたしを侮辱したわ！」
机を叩いた拳は、ただゼロと侮辱されたからじゃない。怒り心頭のルイズだが、それをどこか一歩引いた距離から、冷めた目で見ている自分がいるのを感じていた。
「『なるほど、そのガラガラ声は風邪を引いてたからだね』『いやあ、そんな体調でも授業を受けるなんて』『こんなに勉強熱心な子を虐めちゃいけないよルイズちゃん』」
思わぬ横槍に、教室には新たな笑いが湧いた。
ルイズは心中で、ほら見なさいと呟く。こんなタイミングで貴族相手に皮肉を言える平民が普通にいるわけないじゃない。
「僕はかぜっぴきじゃなくて、風上のマリコルヌだ！」
ブーメランのように返ってきた自分への嘲笑に耐えられず、マリコルヌも席から立ち上がった。
そこでシュヴルーズは手にしている杖を小さく一振りすると、ルイズとマリコルヌは足の力が抜けたように、席へと落ちる。
「お友達をゼロだのかぜっぴきだの呼んではいけません。わかりましたか？」
そう正論を掲げて二人を諭すシュヴルーズに加担するように言葉を発した者がいた。またもルイズが召喚した使い魔である。
「『そうだよ』『騒動の原因を作ったのが先生なのに、その事に全然気付かないで善人面してるからってさ』『皆して空気を読んでルイズちゃんをからかうのはよくないよね！』」
教室が別の理由で静寂に包まれた。ルイズが「教師にまで何を言ってるのよ！」と襟を睨みつけるが、襟は涼しい顔で受け流す。
嫌に張り詰めた空気を、シュヴルーズはこほんと一つ咳き込むことで破った。
「確かにわたしの配慮不足でもありましたわ。ごめんなさいね、ミス・ヴァリエール」

「いえ……」
平民の指摘でも自分の失態を素直に受け止めるシュヴルーズをルイズは内心で評価しつつ、それを配慮不足とするのは、ルイズの無能を暗に認めているのではないかとも思う。
いくら悪意がなくたって、心の奥底には変わった使い魔と言うだけの何かがあるのだ。その何かが時間経て膨れ上がり現状を作っているのも、ルイズは体感でわかっていた。
「それでは皆さん、授業を始めましょう」
シュヴルーズが杖を振ると、石ころが数個机に現れた。続けてシュヴルーズが自己紹介を行う。
「私の二つ名は“赤土”。赤土のシュヴルーズです。“土”系統の魔法を、これからの一年で皆さんに講義していきます。魔法の四大系統はご存知ですね？　ミスタ・マリコルヌ」
「は、はい」と自分が当てられたことに僅かな緊張を見せながら、マリコルヌがその四つの系統を挙げていく。『火』・『水』・『土』・『風』だ。これに今は失われ伝説として扱われている『虚無』が加わり、全部で五つの系統がある。
その中でも土は最も重要な要素であるとシュヴルーズは語る。やたらと、自分の系統だから贔屓しているのではないと付け足しながら。
「『土』系統の魔法はですね、万物の組成を司る重要な魔法であるのです。この魔法がなければ、鉄などの重要な金属を作り出すこともできないし、またそれらを加工することもできません」
要は建築や農産物など、人との生活に結び付きが強い属性が『土』なのだ。
「今から皆さんには土系統の基本である『錬金』の魔法を覚えてもらいます。一年生の時にできるようになった人もいるでしょうが、何事においても基本は大事ですので、おさらい致します」
シュヴルーズが杖を軽く掲げて、短くルーンを唱える。すると石ころが光りだす。

そして光が収まると、小石は全て光る金属に変わっていた。
「ゴゴ、ゴールドですか？　ミス・シュヴルーズ！」
「違います。これはただの真鍮です」
キュルケが身を乗り出すようにシュヴルーズに質問すると、シュヴルーズがそれを否定した。なんだ、と落胆したキュルケが席に座り直す。
――どれだけわかりやすいのよ。
ゴールドの錬金はメイジの中でも最高位である『スクエア』しか錬金できないし、多くの精神力を消費するため簡単には作れない。それに、わざわざここで錬金するような金属でもないだろう。シュヴルーズも同じような説明をした。
「私はただの……『トライアングル』ですから」
途中の溜めた部分では、勿体ぶったように咳払いを一つして自分のランクを語った。咳払いが癖なのだろうか。
メイジは『土』と『火』や、『土』が二つというように、系統をかけ合わせて魔法を使える。また、その足せる系統の数がメイジとしてのレベルを示す。一つなら『ドット』、二つなら『ライン』と言った感じだ。
ルイズは魔法こそ使えないが、その分座学の成績は非常に優秀だ。こんな復習なんて、ルイズなら教科書も見ずに全部事細かに説明できる。
そんな余裕もあり、ルイズは授業を聞くのもそこそこに、自らが召喚してしまった使い魔について思い耽っていた。
普通でない経歴に、普通でない平民。普通でない出来事。
球磨川禊。自称他の世界から来た少年。
ふと、床に座る使い魔へ視線を送る。
禊は階段に座り込んで、食い入るように授業を見ている。
異世界……。別世界なんて、そんな荒唐無稽な話が本当にあるのだろうか。
今だってそんな馬鹿なと思ってはいるけど、禊を召喚してからた

った二日で、ルイズは禊にすっかり振り回されていた。
鍵が解除される。
食事がなくなる。
禊は幾つマジックアイテムを隠し持っているのだろう？
そもそもアンロックと同等の効果ならまだしも、あれだけあった食事がこうまで綺麗に、それも一瞬で消え去るマジックアイテムなんて、ルイズの知識にはない。
そして何より、ルイズが呑まれているのは、禊の独特な雰囲気だ。
このハルケギニアで育ったとは思えない思考と言葉が、本来なら笑い捨てるような可能性を“もしかして”というレベルにまで引き上げさせている。
薄っぺらなのに、心に残る。
空々しいのに、思いを揺るがす。
この使い魔は、嘘が意味を持って形を為したような人間だった。
その嘘がちょっとずつルイズにも侵入してくるような……。
「ミス・ヴァリエール、ちゃんと授業を聞いていましたか？」
「あ、は、はい！　なんでしょう」
迂闊だった。いきなり意識を授業に引き戻されたルイズは流れについていけないし、この非はどうしようもなくルイズにある。
「授業中に余所見をする余裕があるなら、あなたに錬金をやってもらいましょう」
「私が、ですか？」
自分に錬金の実践が振られたということは、今はまだ錬金解説の続きなのだろう。
「先生、それはやめておいた方が……」
「どうしてですか、ミス・ツェルプストー」
「危険です。ルイズを教えるのは初めてですよね？」
キュルケがまるで早まるなと言いたげにミス・シュヴルーズを止めようとする。それが却ってルイズの負けず嫌いに火を付けた。
「やります。やらせてください」

「そうですミス・ヴァリエール、確かにあなたを受け持つのは初めてですが、努力家というのは聞いています。失敗を恐れずやってごらんなさい」

「ルイズ……早まらないで」

周囲の反対を押し切り、ルイズが教壇に立つ。

キュルケは血の気引いているようで、他の生徒達も皆机の下に隠れていく。奥の方に座っていた青い髪のタバサという少女だけは、さっさと教室を出て行ってしまった。禊は……そのままの体勢といつもの笑顔で教壇のルイズを見ている。

そんな禊の姿が、失敗したらどうしようとルイズに僅かな不安を想起させた。

ここで魔法をしくじり爆発させたら、禊に自分が魔法の使えぬゼロだという事実がバレてしまう。

そうしたら、あの使い魔はルイズをどういう目で見るのだろう。貴族として見下した目線が、虫でも見下げるようなものに変化するイメージが、ルイズに渦巻く。

だけど、このままならどうせそう遠からずバレるのは変わらない。それなら必死に『コントラスト・サーヴァント』に挑んだように、ここで一か八かの勝負に出たって……。

――そうよ。是非はともかく、わたしは使い魔の召喚に成功している。つまりもうゼロなんかじゃない！

『サモン・サーヴァント』とその後の『コンストラクト・サーヴァント』には成功しているという実績。そこから湧いてくる自信が、無謀にもルイズの背を押してしまった。

「さあ、集中してルーンを唱えるのです」

「はい」

ミス・シュヴルーズのアドバイスに従い、ルイズは目を閉じて『錬金』の詠唱を始めた。

――そうだやれる。私はやれる、もう誰にもゼロとは言わせない。

自信と裏返しの不安を籠めて、杖を振り下ろす。爆発した。現実

とは非常である。
　爆心地のルイズとシュヴルーズは吹っ飛んで黒板に叩きつけられた。
　爆風と悲鳴が織り交ぜられ、使い魔達が混乱と恐怖で暴れ始める。睡眠を妨害されたキュルケのサラマンダーは不機嫌を示すように炎を吐いて、マンティコアがガラスを破って飛んでいく。風通しの良くなった窓から大きな蛇が入ってきて、近くにいた烏を一飲みにしてしまう。
　たった一つの失敗で、教室は収集のつかない混沌とした空間となった。
「だから言ったのよ！　ルイズに魔法を使わせるなって！」
「人の忠告を聞かないからこうなるんだよ！」
「僕のラッキーが……ラッキーが蛇に食われたー！」
　シュヴルーズは泡を吹いて痙攣したまま動かない。どうやらラッキーに次ぐ被害を受けたのはシュヴルーズだったようだ。
　ルイズがゆっくりと立ち上がる。煤（すす）まみれで、ブラウスとスカートも破れており、肩やパンツが覗けていた。なんともみすぼらしい格好である。
　ハンカチで煤を拭いながらルイズが言う。
「ちょっと失敗したみたいね」
「どこがちょっとだよゼロのルイズ！」
「いつだって成功の確率ゼロなのに！」
　いつもと変わらぬ生徒達からの野次だったのだが、今度ばかりは切実な叫びだった。
「『やっぱり魔法が成功しないからゼロってわけだ』『ルイズちゃんが僕を召喚した理由が少しわかったよ』」
　いつの間にか禊が烏を肩に乗せて、キュルケの机に座っていた。ルイズの失敗前と変わらぬ笑顔で服にも汚れた形跡はなく、阿鼻叫喚の教室を見回している。
「あなた、よくあの爆発で避難もしてないのに無事だったわね」

なんてことない様子で、禊は肩の烏を指さしてキュルケへの回答を返す。

「『きっとこの使い魔の幸運（ラッキー）が』『僕に取り憑いたのさ』」

第六敗『それが君の個性だから』

教室を破壊し、シュヴルーズを失神させたルイズが受けた罰は、魔法不使用での後片付けだった。

元来魔法が使えないルイズにとっては、付随の条件が機能しないのは言うまでもない。

教室を著しく損傷させ一時的とはいえ使用不能にし、教師に怪我まで負わせたというのに、与えられたペナルティは思いのほか小さいものだった。これはシュヴルーズが生徒達の制止を聞き入れず、ルイズに魔法を使わせたことも問題として扱われたためである。

主人と使い魔は一心同体という理屈から、禊も手伝い二人で片付けているのだが、会話もなく無言で黙々と作業をこなしているだけだ。

ルイズは、禊にとってゼロというあだ名はルイズで遊ぶ恰好の燃料であり、喜々としてなじってくるだろうと思っていた。そのためルイズからすれば、この沈黙は逆にいつ刑が執行されるかわからぬままに、絞首台に乗せられ続けているようなものだ。

まさか余りの哀れさに禊の同情を買ったというのだろうか。たった二日でうんざりするまで弄られていたのだから、その想像をする方がルイズの心には堪える。

やがてこの沈黙に耐え切れなくなり、ルイズから先に口を開いた。

「ねえ」

話しかけられても、聞こえてないみたいに禊は何も応えない。一人で箒（ほうき）を使い塵を集めているだけだ。

「これが私の二つ名、“ゼロ”って呼ばれている理由よ」

禊は応えず、あくまで沈黙を守る。自ら走りだしたルイズは独白となった話を勝手に進める。

「子供の頃からずっとそう。私が魔法を使おうとすれば必ず爆発する。何を唱えてもよ」

禊は応えない。ルイズは続ける。
「何度も何度も練習したし、せめて他のことはって、勉強も必死でして魔法学院でもトップクラスになったわ」
禊は応えない。ただ、その視線だけはルイズに向けた。ルイズは止まるタイミングを逸して、独りよがりに加速していく。
「でもどれだけ練習したって、勉強したってゼロはゼロ！　どれだけいい成績を残したって、魔法が使えないメイジなんて、誰も認めてはくれないわ！」
加速は悲鳴のような叫びとなって、ルイズの魔法と同じように爆発した。もう自分でも止められない。
「あんたもそうなんでしょ！　心の中じゃわたしをゼロのルイズって馬鹿にしてるんでしょ！　何とか言いなさいよ！」
「『どうして？』」
そこでようやく球磨川が反応を示した。独白がキャッチボールとなる。
「どうしてって、どういう意味よ？」
「『ルイズちゃんはそれでいいんだよ』」
「いいわけないでしょうが！」
「『そんなに落ち込まないで』『元気を出して』」
やっぱりこの使い魔も安い慰めの言葉をかけるだけなんだ。そんな諦観と、こんな奴にまで同情の念をかけれる自分が、どこまでも腹立たしい。
だけど。そう、だけど。
「『プライドだけは一人前で』『どんな魔法でも失敗させちゃって』『普段は強気でもすぐに落ち込んじゃう』『貴族としてもメイジとしても半人前の落ちこぼれ』『ぜーんぶ中途半端な脆い女の子』」
ルイズが禊を普通だと思ったのは、思えたのはほんの一瞬だけだった。
禊という使い魔は、ルイズがこれまで出会ってきた、どんな貴族とも平民とも違うのだから。

つかつかと、禊がルイズに近寄ってくる。
――何よ、これ？
罵詈雑言を浴びせながら、禊はそれらを全肯定する。
気持ち悪い。
空間が捩れ曲がるような気持ち悪さが、禊を中心に広がっていくのをルイズは感じた。
「『でも』『その弱い子がルイズちゃんだよ』『それが、かけがえのない君の個性なんだから！』」
もうこれは理屈ではなく、感覚的に禊が気持ち悪くてしょうがない。
目に映る姿も、聞こえてくる声も、肌に纏わり付いてくる気配も、全部がだ。
でも逃げられない。身体が言うことを聞かず、ガチガチと歯の根が合わない音だけが、ルイズの正気を保ってくれている。
ずいっと、禊はルイズに息がかかる距離まで近付いた。これまで感じたことのない気持ち悪さが、ルイズの身体を這いまわり、身体が震える。
「『無理に変わろうとせず、自分らしさを誇りに思おう！』『君は君のままでいいんだよ』」
これは慰めなんかじゃない。そんなわけあるものか。
ルイズの善い部分と悪い部分、そのどちらも一緒くたに混ぜられて、全部を台なしにされた。
ルイズは堕とされている。その心を、禊という負の塊に魅入られて穢されていた。
「うるさい」
ルイズは、自分の心が悲鳴を上げる音を聞いた。
否定の言葉。そんなのはいつものことだった。キュルケや他の生徒達。自分を馬鹿にする者をルイズは常に否定し続けてきた。
でも違う。これは……これだけは違う。
「うるさい！　うるさい！　うるさい！　うるさい！

うるさい！　うるさい！　うるさい！　うるさい！　うるさい！　うるさい！」

怒りではなく恐怖。

固まるのではなく凍える。

投げ出したいのではなく逃げ出したい。

――助けて、誰か助けて。お父様お母様エレオノール姉様ちい姉様オールド・オスマンミスタ・コルベールミスタ・シュヴルーズキュルケもう誰でもいい。誰でもいいから助けて。

心からの拒絶。全身全霊の悲鳴。

「こっちに来ないで！　わたしに触れないで！」

――お願いだから、これ以上、わたしの心を穢さないで。

恐い。怖い。こわい。こわいこわいこわいこわいこわい。

「あんたはわたしの使い魔なんかじゃない！　あんたはわたしが召喚に失敗して、たまたまそこら辺にいた平民を連れてきただけよ！」

もう貴族としてのプライドなんてなかった。何でもいいから、禊をなかったことにしたかった。使い魔なんていないことにしたかった。現実（なにもかも）をなかったことにしたかった。

気が付けば走っていた。どこにも向かってない。離れたいだけだったから。走れたことを心から喜んだ。

でも。

でも、聞こえてしまった。聞かされてしまった。走る出す前の、最期の言葉。

「『現実さえなかったことにして逃げる』『そんな君の無能（ゼロ）を受け入れればいいのさ』『そうすれば君は……』」

思い出したくない。聞きたくない。消えろ記憶から消えてしまえ。

思えば思う程に、その言葉はルイズを支配する。

色濃く、真っ暗に、ルイズの心を塗り潰す。

「『過負荷（ぼく）と同じになれる』」

●

自分から逃げ去ってしまったルイズの背を見送り、禊はポリポリと頭髪を掻いた。

「『ちょーっと』『やり過ぎちゃったかな？』」

最近の相手は異能集団の異常（アブノーマル）だったり、挫折をしない特別（スペシャル）だったり、頑張っちゃった善吉ちゃんだったりで、禊は精神負荷への力加減が鈍っていたのかもしれない。

「『ん』『まあ、いっか』」

禊は己が所持する凶悪な能力（スキル）さえ、これまでほとんどノリでしか使って来なかった根っからの過負荷（マイナス）だ。ルイズを追い詰めすぎた失敗についても、ろくな反省などするわけがない。

それにもし彼女が真に無能（ゼロ）なら、このままルイズに付き添っていれば後は勝手に過負荷（マイナス）へと転がってくるだろう。そういう思いもある。

禊が喚ばれたことに意味があるとするなら、それはルイズを過負荷（こちら）側に引き込むためだろうと、禊はなんとなく解釈していた。ルイズが禊の味方になれば、帰る方法も積極的に探してくれるに違いない。

そういう計算をしながら、禊は残りの片付けを一人で済ましていく。失敗（マイナス）の後始末なら、それがどんな内容であれ慣れたものだ。誰も注目（みて）してないので、能力（スキル）は使わない。

教室が元通りになった頃には、昼休みの時間となっていた。

「『お昼ご飯は、ありそうもないな』」

別に食べなくても体調面は困らないのだけど、食べられるなら食べておきたい。考えた末に、禊は一人で食堂へと赴いてみることにした。素直な気持ちで昼食を分けて欲しいと言えば、きっと貴族の人達は食べ物を差し出してくれるよね。という言葉の意味が何重にもかかっていそうな思惑を持ちながら。

●

シエスタが昼の仕事に勤しんでいる最中、食堂近くの廊下にて今日の朝と同じ黒い背中を見つけた。
「あ、禊さん」
「『やあ、シエスタちゃん』『朝方ぶりくらいだね』」
その朝方が初対面だったというのに、もう長年の友人みたいな気軽さで、禊はシエスタに手を振る。そんな気安さがシエスタにはどことなく嬉しくもあり、すっと禊に並んだ。
「ええ、禊さんは今から昼食ですか？」
「『そうしたいのは山々なんだけど、ご主人様がご機嫌斜めでね』『どうせ準備もされてないだろうから』『昼食を食べる貴族様を至近距離から指を咥えて見てよーかなっと』」
「そんなことしたら、貴族様から怒られるではすみませんわ！」
どんな物乞いだ。しかも、それをあえてやる意味はどこにあるのだろう。
今朝からの付き合いでしかないが、シエスタは禊から独特な言動や雰囲気を感じ取っていた。
「『案外腹ペコの平民を哀れんで、食べ物と全財産を差し出してくれるかも』」
禊が言っているのはただのジョークだとわかる。だが、変わり者の禊は貴族に対する畏怖が特に薄い気がした。
「それはないと思います……。冗談でも貴族様を相手にそんなこと言うなんて、禊さんは勇気ありますわね」
シエスタが怒られている時だってそうだった。禊はとばっちりを恐れて逃げたり、嵐が去るのを待って萎縮するわけでもなく、じっとこちらのやり取りを見ているだけ。
貴族の恐ろしさを知るシエスタは、それを薄情だとはまるで思わなかったけれど、怒っている貴族を前にどうして平然としていられるのだろうか？　そういう疑問は残っていた。
『いやあ、それ程でも』

褒めているわけじゃあないのだけど……。まかり間違って実行されたらどうしようとも思うし、食事がなくて困っているのは事実だろうと、シエスタは襖に提案を出す。

「よろしかったら、一緒にいらっしゃいませんか？　私達が食べている賄い食ならありますから」

「『今朝出会ったばかりの僕にそこまでしてくれるなんて、シエスタちゃんはいい子だね』『がっつくようで悪いけど、遠慮なくいただくよ』」

「平民が一致団結して助け合うのは当然です。それでは、こちらにいらしてください」

シエスタは屈託のない笑顔で、襖を誘導していった。通されたのは食堂の裏側にある厨房だ。そこにある椅子に襖は座らされて、シエスタがシチューを持ってきてくれた。

「貴族の方々にお出ししている昼食の、余り物で作ったシチューですが……」

「『ありがとう！』『昨日召喚されてから初めてのまともな食事だから、たぶん何でも美味しく感じるけど』『きっとこれは特に美味しいよ』」

それは褒めてませんよね、などと思うのだけど襖が嬉しそうに食べ始めていたし、シエスタは前向きによしとしておく。

それより、シエスタには他に気になったことがあった。

「昨日から何も食べていないのですか！？」

「『正確には、朝スープとちんまいパンは貰ったかな』」

「それではとても足りないでしょう。おかわりもありますから、遠慮なく言ってください」

いきなり召喚されて使い魔にされ、ろくに食事も与えられない。それはシエスタだけでなく、ここの食堂にいる者達を同情させるには十分だったようだ。

「やっぱり貴族ってのはどうしようもない連中ばかりだな！」

「『おろろ？』『この人は誰かな？』」

「この方は食堂の料理長でマルトーさんです。それで、こちらが昨日ミス・ヴァリエールに召喚された使い魔のミソギさん」
「やっぱりお前が例の不幸な使い魔だったか。災難だったなあ」
たまたま通りかかってこちらの話が聞こえたのだろう。
マルトーが禊の背を大げさに叩くが、禊はそれを気にせずシチューを食べながら話を続ける。
「『エリートに迫害されるのは、息をするのと似たようなものですから』」
「お前は前いた場所でも貴族の被害を受けてたのか、本当になんて奴らだ！　俺じゃあ食事くらいしか面倒は見てやれないが、食べる物に困ったらいつでも来な！」
「『マルトーさんはわざわざ貴族の生産場みたいな学院（とこ）で働いてるのに』『わかりやすく貴族嫌いなんですね』」
初対面で、しかも食事を恵んでもらっている相手とは思えないような軽い口調でクリティカルな話題を出されたのだが、マルトーはさして気にした風もない。
「ここの学園長に誘われたんだよ。あの人は貴族じゃ珍しく、貴族と平民をあまり差別しない人でな。そこが気に入ったんだ」
「『へえ、それは僕も機会があれば一度ご挨拶しておきたいな』」
「おっと、俺はまだ仕事中なんでな。お前はゆっくり食べていけよ」
軽く挨拶をしてマルトーはまた厨房へと戻っていった。シエスタは禊と対面の椅子に腰掛けており、動く気配はない。禊の食事が終わるまで、付き添うつもりなのだ。
「『どうしたの、シエスタちゃん』『僕の顔、シチュー塗れにでもなってる？』」
「いえ……。その、禊さんは何ていうか、どこかわたし達と違うなと思ったのです」
「『きっとそれは』『僕が過負荷（マイナス）だからね』」
「マイナス？」
聞き覚えのない単語だったので、シエスタはオウム返しをした。

禊は咥えていたスプーンを縦に持ちくるくると回して、簡潔に説明を付属させる。

「『人生の負け組だよ』『僕達過負荷（マイナス）は常に劣等感（じしん）に満ちていて』『人に道（さけ）を譲られて生きてきた』」

「えーと……すみません。わたしあまり頭がよくないので、ミソギさんが何をおっしゃりたいのか、今ひとつわかりかねますわ」

どうも禊の話す内容は、シエスタには解釈の難しいものだった。シエスタが言葉遊びに慣れていないのもあるし、それ以前に話が要領を得ないというのもある。

「『ベタな修飾を外して言うと』『よくあるただの虐められっ子さ』」

「私にはそう見えませんけど。禊さんはお話をしてると面白いし、苛められるような酷い人だとは思えません」

「『シエスタちゃんだってそうだろう？』『いい子だけど、貴族達に虐められていたじゃないか』」

「あれは、わたしが粗相してしまいましたから。それに貴族様と平民じゃ、住む世界が違いますわ」

シエスタにとって、貴族と平民の間にあるものは差別というより差異に近い。平民は貴族に奉仕して生活の糧を得るものだと教えられて育ってきたためだ。

「『その考え、不幸（マイナス）の境遇を受け入れてしまう思考が』『過負荷（マイナス）の第一歩なのさ』」

禊のそれは小さくポツリと呟いた程度で、シエスタにまで届きはしなかった。

「あの、今何て？」

「『女の子にここまで優しい言葉をかけてもらったのは、生涯初めての経験だなってね』『あ、おかわりもらえるかな』」

それからは禊が食事を終えるまで、二人は取り留めもない話をして過ごした。話をすればするだけ禊は普通とは違う考え方をしているなとシエスタは思ったが、その物珍しさはシエスタを楽しませる

のに十分だった。
「『ごちそうさまでした』『さて、シエスタちゃんには助けてもらいっぱなしだし』『ここで一つ何か恩返しがしたいんだけど、いいかな？』『僕は死んだお爺ちゃんの遺言で、助けられたら千倍返ししろと教えられてるんだ』」
「恩返しだなんて、気になさらないでください」
「『平民は助け合いだと言ったのはシエスタちゃんだぜ？』『だから何か手伝えることはないかい？』『できればあっちの食堂関連で』」
どうして食堂に絞ったのかはわからないが、シエスタは丁度食後のデザートを貴族達に運ぶ予定だったので、それを手伝ってもらうことにした。
「なら、デザートを運ぶのを手伝ってくださいな」
「『お任せだよシエスタちゃん』『僕は前世でパティシエの料理を運ぶ係だったような気がする』」
「うふふ。それでは行きましょう」
本当にユニークで面白い人だなと思いながら、シエスタは禊と共に、ケーキを載せたトレイをワゴンに乗せて食堂へと向かった。

第七敗『君が軽率に』

トリステイン魔法学院において、ギーシュ・ド・グラモンは有名な女ったらしだった。本人もそれは自覚しているが、考えた末に出した答えは、

「なあ、ギーシュ！　お前、最近よく朝と夜にいなくなるけど、誰と付き合っているんだよ！」

「誰が恋人なんだ？　教えろよ、ギーシュ！」

「つき合う？　付き合うだって？　僕にそのような特定の女性がいるわけないだろう。　薔薇は、多くの人を楽しませるために咲くのだからね」

これである。金髪を巻き毛にして整えた相貌は美男子といって差し支えないのだけども、いささか自分に自信を持ち過ぎており、ナルシストも併発しているのだ。

友人が自分に注目する様が気持ちいい。ギューシュが食堂にてそんな目立ちたがり屋の自尊心を満たしていた時、不意に彼のポケットから一つの小瓶が転がり落ちた。

――不味い！

それはギーシュがモンモランシーからもらった香水が入った小瓶だ。これが誰かに見つかってしまったら、ギーシュとモンモランシーが付き合っていることがバレてしまう。それ単体では問題ないが、今この食堂にはギーシュが浮気しているケティという下級生もいるのだ。

もしここでそれが表に出てしまったとなれば二人共と破局してしまう。それだけは避けねばならない。

幸い、話していた友人達は小瓶に気付いていないようだ。ならば、隙を見てさっと回収してしまえばそれでいい。

そうギーシュが安堵していると、近くに給仕の二人組が近くを通りかかった。

黒い服の平民がケーキの乗った皿を持ち、もう一人のメイドがそれをテーブルへと配っていく。あの二人組は朝ケティに洗濯物をぶちまけた平民だったと憶えているが、そんな瑣末な出来事などもうどうでもいい。ギーシュにとってはそれだけの者達だ。

ギーシュは二人を無視して話を続けていたが、黒い服の平民がすっと小瓶に近寄り、ゆっくりとその足を小瓶へ落とした。

ただの小さいガラスの小瓶が、男一人の体重を支えられるわけもない。鈍く低い音が、平民の足の下で鳴った。

思わずギーシュが黒い服の男に声を上げる。

「おい、平民！　君は何をやっているんだ！　それは僕がモンモランシーからもらった大切な香水の瓶だぞ！」

「ミソギさん、なんてことを……」

朝とは比較にならない怒りを露わにするギーシュに、もう一人のメイドが震え上がった。しかし禊の態度は踏む前から僅かも変化がない。

「『ああ、ごめーん』『気付いていたけど、踏み心地の良さそうな瓶だったから』『ついつい踏んじゃったよ！』」

謝りつつも、禊はぐりぐりと割れた瓶を踏み躙る。

反省心が皆無を通り越して、わかりやすく直接的に挑発してきていた。こんな無礼な平民はこれまで見たこともない。

「それは、たまたま僕が気付いていなかっただけだ。そもそも君、貴族の物を足蹴にするとは、どういうつもりなのだね」

ギーシュが球磨川に食ってかかるが、そこに一人の少女が割り込んだ。それはギーシュと早朝の時間を共にしていたケティだった。

「やはり、ギーシュ様はミス・モンモランシーと……」

「ま、待ちたまえケティ。誤解だよ、僕の心の中に住んでるのは君だけ……」

「その香水が何よりの証拠ですわ！　さようなら！」

ケティがギーシュの頬をはたき、涙に目を溜めて別れを告げて走り去っていった。赤く腫れた頬をさするギーシュの受難はこれだけ

では終わらない。
　次にやってきたのは金髪の髪を縦にロールさせた少女モンモランシーだ。彼女こそがギーシュに香水をプレゼントした張本人で、ギーシュからしても本命の相手である。
「モンモランシー！　彼女とはただ一緒に、ラ・ローラシェルの森に遠乗りをしただけで……」
「『遠乗りって、朝から校内でデートをすることなのか』『ありがとう！』『一つ勉強させてもらったよ！』」
　禊のタイミングを見計らった口撃に、ギーシュの顔が青くなる。わざわざ早朝にしたのは、モンモランシーにバレない時間を考慮してのことだった。
「あらあら、本当に一年生の子と、仲がよろしいみたいねえ！」
　モンモランシーはテーブルに置かれたワインを引っ掴み、ギーシュの頭にドボドボと全部降りかける。そして一言、
「嘘吐き！」
　怒鳴り、モンモランシーもギーシュから走り離れていった。修羅場は終わり、そして食堂全体に気不味い沈黙が訪れる。
　モンモランシーの香水瓶を踏み潰された上に、浮気男のレッテルまで貼られた。どうしてこうなったと、ギーシュは心で滂沱の汗を流す。一先ず場の空気を誤魔化し、かつこれらの恨みをぶつける相手はたった一人しかいない。
「あのレディ達は、薔薇の存在の意味を理解していないようだ。そしてこうなったのは君の責任だよ、平民！」
　ギーシュは一歩踏み出して球磨川に近付き、許し難い相手に話の焦点を絞った。
「君があろうことか香水の瓶を踏み潰したために、二人の乙女が傷つくことになった」
「『やれやれ』『二股を他人に責任転嫁するなんて』『近頃の貴族はどういう教育を受けているんだい？』」
「黙れ、何より許せないのは、あれがモンモランシーからもらった

大切なプレゼントだと言うことだ！」

瓶を潰されたこの一件については、ギーシュは純粋に被害者だ。というかモンモランシーの香水を駄目にされたのは、本当に凹んだし、かなり怒っている。

「『そうだね』『そっちは僕の不注意だったよ』」

さっきはわざと言っていただろうが。どれだけテキトーな奴なのだ。朝メイドが粗相をした時にメイドへ苦言を呈したのは、ケティがいる前で格好付けたかったためだが、禊に対しては本気で罰を与えるつもりだった。

「『けれど残念』『君は一つ大きな勘違いをしているよ』『僕は香水を踏み潰してなんてない』」

「いやいや、言い訳にしても内容を考えたまえ。君はずっと踏みつけたポーズのまま会話し続けてるじゃないか」

大方罰を受けるのが恐いのだろうが、現場押さえられておいてそれじゃあ、苦し紛れにもならない。

「『僕はギリギリで踏みとどまったのさ』『それを君が踏みつけたと勘違いをして』『僕に怒鳴ったんだ』」

「こっちは瓶が潰れる音まで聞いたのだよ。これ以上見苦しい嘘吐きを続けるのなら、さっさとその足をどけたまえ。それではっきりするだろう」

『嘘吐きか……よりにもよって僕に“それ”を言うなんてね』

「いいかもう一度言うぞ。僕は、モンモランシーの瓶から、平民の汚い足をどけろと言っている！」

引くに引けなくなって意味不明な見栄を張り、余計逃げ場を失う。この平民は悪循環にはまっている。

――見苦しい！

ギーシュはこのくだらない問答を終えて、もっとはっきりとこの平民を糾弾してやりたかった。

「『ならば皆さん』『とくとご高覧あれ！』」

禊がそう言ってわざとらしくギャラリーの注目を集めて、勢いよ

く足を上げた。
ギャラリーは皆ギーシュの怒りは本物と捉えており、瓶の話も疑っていなかったのだろう。そのため、どけられた足の下にあったものを見て周囲からざわめきが生まれたし、ギーシュは思わず絶句した。
――何でだ!?　そんな、あり得ない！
そこにあったのは、その原型をはっきりと留めている香水の瓶だった。
信じられず、ギーシュは瓶を拾い上げる。瓶には割れた痕跡どころか、傷の一つも付いてはなかった。
「おいギーシュ、どう見ても瓶は壊れてなんかないぞ」
「中身だって全然漏れてないじゃないか」
取り巻きの言葉で、ギーシュははっと気付く。
そう言えば瓶が割れたのに禊の足の下からは、香水が漏れてきたり、匂いが漂ったりもしてなかったのだ。
「な……そんなはずは」
ギーシュは瓶を回しながらベタベタ触り、とにかく調べまくる。
――どうしてだ？　瓶が砕けた音を聞いたのは間違いないのに。
踏みにじった傷跡が一つもないのだって、おかしいぞ。
「『これで僕は転がってきた瓶を踏みそうになったけど』『これは貴族様の私物に違いないと何とか堪えた健気な平民だと信じてもらえたかい？』」
「ふ、ふざけるな！　僕は見たし、聞いたんだ！　お前が喜々として香水を踏み壊して、その上グリグリとその足を動かした所を！」
「ギーシュ、いくら浮気がバレたのを平民のせいにしたいからって、それはないよ」
「どう見たって、浮気をしたお前が悪い！」
ギーシュが自分の正当性を主張していると、彼の友人達が禊の味方をし始めた。友人達は禊が瓶を踏んだ場面は見ていないし、踏みにじっている姿はギーシュに隠れて見えていなかったのだろう。

誰かが禊に魔法をしようしているかを確認する『ディテクトマジック』までかけたが、結果、禊は白だった。これが単純に踏んだ踏んでないの水掛け論なら、多少自分側が怪しくとも貴族が正しいと押し通せるが、方法はさっぱりだが割れてない香水という証拠がある。ほとんどの者が事件現場を見ていないから、誰も彼も、ギーシュが平民に濡れ衣を着せているようにしか思えないのだった。

「そんな……」

数少ない例外が禊と一緒にいるメイドだが、彼女は朝叱った身だし、まず禊の味方をするだろう。このままだと背負わなくていい罪までギーシュが背負う羽目になる。

「『君が軽率に二股なんかしたために』『二人の乙女が傷つくことになった』」

先程のギーシュが言った台詞を、禊が意趣返しに使用した。それに乗ってギーシュの友人達もそうだそうだと勝手に盛り上がっている。

「『が』『しかし』」

と、ここで謂れのない罪まで着せられたギーシュに助け舟を出したのは、そこに追い込んだ張本人の禊だ。

「『僕が危うく瓶を踏みかけたことが、二股発覚の発端であるのは認めよう』『だからさ』『お詫びとして僕がさっきの二人と君の仲を戻(なお)してあげるよ』」

「君がだって？　たかが一平民が、どうやってモンモランシーとケティとの仲を取り持つと言うのだい？」

「『僕はこれでも、恋愛にかけてはエキスパートなんだよ』『少年漫画はラブコメにも精通しているからね！』」

「ショウネンマンガ？」

聞き慣れない単語だけど禊は自信満々な様子だ。仮にこの平民が本当に恋愛のエキスパートだったとしても、それはやはり平民間の話である。

「『もし僕が君達の関係を戻(なお)せなかったら』『好きな罰を僕に与え

てくれてかまわないよ』」
「なんだって？」
　禊がさらなる譲歩を自分から差し出した。絶対的に有利だったのは禊だというのに、たった数回のやり取りでまるで立場が逆転したようだ。
　ギーシュには禊の意図がさっぱりわからない。不気味さばかりが先に立つ。
「いや、しかしだね……」
「『嫌ならいいよ』『そうなれば君は、二股の罪をその辺の善良な平民に全てなすりつけようとした』『誇りなき女ったらしの貴族に成り下がるだけさ』」
「うぐ……」
　まだ渋るギーシュに、禊は立場を利用した脅しをかける。これもかなりの有効打だった。
　ここを何とか凌がなければ、女子二人からの信頼失墜だけでなく、暫くは学院の女子のほとんどがギーシュを白い目で見るだろう。ギーシュにとって、それはもう生き地獄と同義だ。
「『そう言うことだから』『ここは僕に任せてちょーだい、ギーシュちゃん！』」
「わ、わかった。君の申し出を受けよう。ただし、失敗は許されないからね」
「『うん』『僕のご主人様にかけて誓うよ』」
　ここでようやく、そう言えばこの見慣れぬ平民は昨日ルイズが召喚した者であると、ギーシュは思い出した。
“ご主人様にかけて”なんて勝手に明言したが、これでこの一件の責任は彼の主人であるルイズにまで飛び火する。黙っていれば自分だけで止まったかもしれない問題に、あえて主人を持ち出すなんて……。この自信はどこから湧いてくるというのだろう。
「『早速とりかかりたい所だけど』『僕はまだシエスタちゃんのお手伝いがあるから』『それじゃ、また明日とか』」

ぽん、と禊が右手をギーシュの肩を軽く叩いた。その妙な馴れ馴れしさにギーシュは一縷（いちる）の不安を得るが、禊はそのままメイドと配膳の続きへ行ってしまった。

「おい、ギーシュ！」

釈然としないまま禊の後姿を見送るギーシュに、彼の友人が驚いたように指をさして声を上げる。

「え？　僕の、服が！」

そしてギーシュは気が付いた。モンモランシーにかけられたワインの染みが綺麗サッパリ消えているのだ。しかもそれだけじゃなく、髪の毛も乾いていて、頬の痛みもいつの間にか引いていた。

「彼は一体、何者なんだ……？」

あのゼロが召喚した平民。ルイズを知る者達からすれば、彼は無能の象徴とも言えるだろう。しかしギーシュにはそんな平民がこの邂逅によって忘れたくとも忘れられない、奇抜な存在となっていた。

第八敗『夕べはお楽しみでしたね』

ルイズは自室でベッドの布団に包まり、心身共に打ちのめされていた。自分が召喚した使い魔は決してゼロではない、それ以下のマイナスだ。

不幸と不条理を集約したかのような禊の存在に飲み込まれそうになったルイズは、渾身の力で逃げ出した。

それが間違いだったとは思わない。そして、間違いだったと思えないことが問題だった。

――あんたはわたしの使い魔なんかじゃない！　あんたはわたしが召喚に失敗して、たまたまそこら辺にいた平民を連れてきただけよ！

ルイズはあの時、自分が禊を召喚したという事実まで自分の口から否定したのだ。

大事なのは、その時ルイズがどういう気持ちで禊を否定したかである。ルイズが何を言おうが、禊が召喚されたという現実は覆らない。

しかし、ルイズの心は違う。ルイズは心の奥底から禊を否定していたし、それは今も同じだ。そしてルイズは禊から逃げ出す直前に、もう自分が貴族でなくていいと思った。

あの瞬間から、ルイズの貴族としてのプライドには、一つの折れ目が付いた。

どれだけ一生懸命真っ直ぐ伸ばしても折れ目は消えない。他の部分がどれだけ美しかろうが、折れ目はくっきりと残って、常にただそこにある。ルイズが自ら自分が貴族であることを否定したという事実は、痕として一生残り続けるのだ。

――『現実さえなかったことにして逃げる』『そんな君の無能（ゼロ）を受け入れればいいのさ』『そうすれば君は……』

そうすれば……。

「わたしも同類（マイナス）になる」
恐怖に駆られて逃げた先は、禊と同じ過負荷（マイナス）という行き止まりだった。
でもきっとこれは予定調和だ。“メイジの技量”とあるのだから、マイナスを召喚したルイズもまた、始めからマイナスだった。そんなマイナス思考が、弱りきったルイズへと去来している。
ルイズはずっとずっと悔しかった。ゼロであることが、ゼロと呼ばれることが悔しくてたまらなかった。
そうであるはずだったのに、今のルイズは、ゼロを否定するのさえ疲れてしまっている。
もういいのではないか？
どれだけ落ちこぼれても上を向き、光る月を見続けていた誇り高き貴族の少女は、もはや大地へと伏せられぼんやりと泥を眺めている。
無能（ゼロ）を受け入れたルイズは真の意味で敗者（マイナス）となるのだろう。
最後の一歩を踏み出そうと、踏み外そうとしていたルイズは、禊が言っていた言葉の意味をようやく悟っていた。
「わたしは、もうゼロで……」
「何やってるのよ、ルイズ？」
身投げするような最後の一歩を、突然の闖入者が打ち消した。その者は、皮肉にもルイズが最も嫌うクラスメート、キュルケだった。

●

昼食を摂るため食堂へ漫然と歩を進めていたはずのキュルケは、自分を後ろから追いぬいて行った者の背を呆然と見ていた。
「あれは、ルイズよね？」
あの子は、昼食も無視してどうして全力疾走しているのだろうか？　ルイズは罰として教室の片付けが命じられていたはずで、昼食だってこれからだし、あの急ぎようはどこか変だ。

もしかしたらルイズをからかえるネタになるかもしれない。後でどうしたのか聞いてみよう。そこでキュルケは思考を打ち切り食堂へと入っていった。

しかし事態はキュルケの思わぬ方向へと転がっていたようで、昼休みが終わりを告げても、ルイズが授業に出席していない。

教師も、ルイズの欠席は聞いていなかったらしく、生徒達にルイズの所在を確認したりしていた。

結局ルイズはその日の授業を全てサボり、遂には夕食にまで顔を出さなかった。

理由は不明なままだが昼間あれだけ走っていたのに、その後の音沙汰は一切ない。『もしかしたら』は『どうしてかしら』へと意味合いを変えて、キュルケの足を動かした。

ルイズの様子を見るにしても、隣の部屋であるキュルケは適任だ。本人は興味本位の理由付けとして勝手にそう考えて、ルイズの部屋をノックした。けれど中からの返事はない。

他の一般的な学生ならここで留守かと引き返すのだろうが、キュルケはそんなお行儀のいい生徒じゃなく、「アンロック」の魔法をかけて部屋の鍵を外してルイズの部屋へと侵入した。重大な校則違反であるが、そんな規約はキュルケの抑止力にはならなかったようだ。

部屋の中にルイズはいた。制服姿のままでベッドに座り両膝を腕で抱えて、頭にシーツを被っているので表情までは伺えない。まるで幽鬼のようになっている。

キュルケの呼びかけには僅かに頭を上げて対応したので、意識はあるらしい。

小さな女の子みたいに、ベッドで縮こまるルイズへ特大の疑念を持ちつつ、キュルケはルイズの隣に腰を落ち着かせる。

「独りでシーツに包まって悩みに耽ってるなんて、あなたらしくないわね」

「……」

ルイズはいつものように食ってかかるわけでもなく、無感動な様子でシーツに包まれているだけ。キュルケの声が届いているかどうかもわからない。

「何よ、返事しなさいな」

「キュルケ……」

キュルケの名を呼ぶルイズの姿は、酷く弱々しかった。いつもはしっかりと整えられている桃色のブロンドもボサボサになっていて、肩は小刻みに震えている。そこに、プライドの塊みたいないつもの尊大なルイズらしさは見る影もない。

「……助けて」

その一言で、キュルケはことの重大さを理解した。

キュルケのツェルプストー家と、ルイズのヴァリエール家は国境を挟んだ隣にあり、長きに渡る因縁を持つ間柄だ。

戦になると互いに杖を向け合ってきたし、色恋沙汰でもツェルプストーはヴァリエールの婚約者を寝取り、両家は何かにつけて争ってきた。それらは二人の関係にも密接に絡みついている。

自分の家名を重要視するルイズは、キュルケをずっと毛嫌いしていた。キュルケはキュルケで、因縁のライバルであるはずのルイズが魔法を使えなくて、これまた別種の憤りを感じて彼女を弄り倒してきた。それはどちらかというと恨み積りではなくて、自分のライバルに足るに相応しい者になって欲しいという願いが強いのだけど。

そうして作られた二人の溝は、そう安々と埋まるようなものではない。

だというのに、あのルイズが自分を取り繕うのも放棄して、キュルケに助けを求めている。

シュヴルーズの授業から昼休みまでの間に何があったというのだろう。キュルケにはそれが想像さえできない。

しかし、ルイズが仇敵にさえ無条件に助けを乞うまでにのっぴきならない状況にまで追い詰められている。

キュルケの二つ名は『微熱』。ここまで弱った者を突き放せるよ

うな苛烈さは、彼女にはなかった。
「まずどうしてあなたがそうなったのかを、一から話して」
「駄目……いつあいつが帰ってくるかわからないから……」
「あいつ？　あの、あなたが召喚した平民のこと？」
この部屋を使用しているのは、ルイズ本人と、彼女が昨日召喚した使い魔しかいない。禊の名を出されたルイズは、不自然なまでにビクンと反応を示した。どうやら問題はこの使い魔にあるらしいとキュルケは確信する。
「それなら鍵を閉めて、入れないようにすればいいじゃない」
「無駄よ、あいつには鍵なんて意味ないもの」
「どうしてよ？」
ルイズは答えず、禊の存在にただ怯えるばかりだ。これでは埒があかないとキュルケは代案を出す。
「ならわたしの部屋に来なさい。このままここにいるより、よっぽど安全でしょ？」
無言のままその提案に乗ったのか、緩慢な動作だがルイズはベッドから降りて立ち上がる。俯き枯れ木のような佇まいのルイズに、嘆息しながらもキュルケは手を引いて自分の部屋に連れ込んだ。
ほとんどされるがままのルイズをベッドに座らせ、キュルケもその右隣へ座る。おまけにサイレントまでかけて、本格的に話を聞く体勢を整えた上で、キュルケは改めてルイズに何があったのかを問いかける。
暫くの沈黙を経て、ルイズはぽつりぽつりと昨日禊を召喚してからの話を語り出した。
メイジのいない異世界から来たという妄言。
アンロックも使わずに鍵を開けたり、忽然と消えた朝食。
そして、教室を片付けていた時に感じた、あの得体のしれない会話と気持ち悪さ。
ここまで弱り切ったルイズが話しているので、それなりのリアリティはある。

だが如何せん、キュルケににはルイズの語る禊の恐さが伝わっては来なかった。気にはなる話だが、話すだけでこうまで気落ちするような気持ちの悪い者というのは、キュルケからすれば想像し難い。

これがまだ普通の生徒であるなら、禊の鋭い言葉によって心に傷を負ったのだろうと考えられなくもないのだが、相手はあのルイズだ。

生まれてこの方魔法を失敗し続けて、それを責め苦に生きてきた少女。だけどルイズが他人に己の弱さを曝け出す所など、キュルケはこれまで見たことがなかった。

悔しくて悲しくとも、そのコンプレックスを内に閉じ込めて決して人に背を向けず、貴族らしさを演出するため尊大に振る舞い続ける少女こそがルイズなのである。

言霊だけで人の心を引き裂く力。禊についての説明を、キュルケは自分なりに解釈して推測を立てた。

「あの使い魔が、ご禁制のマジックアイテムを使って、あんたの心を支配しようとしたわけ？」

「違うわ！　あれはそんなのじゃない！」

これまでずっと大人しかったルイズが、初めて声を張り上げた。その勢いに困惑してキュルケが問う。

「そんなのじゃないってどういうことよ？」

「あの気持ちの悪さは、あいつの声から、あいつの心から感じたのよ。マジックアイテムなんかじゃないわ！」

マジックアイテムの効力が声となっているのかもしれない。そういう考え方だってできるはずなのに、ルイズはそれを違うと断定した。

「わたしは恐かったの。あの気持ち悪いのがわたしの中に侵入（はいって）してくる。それが恐くて、わたしは間違えたのよ」

「間違えたって？」

「わたし、あいつに言ったのよ。わたしはあんたなんて召喚してない。そこら辺にいた平民を捕まえてきただけだって」

ルイズを茶化そうとしたマリコルヌの言葉を、ルイズ自身が認めた。自分が召喚した使い魔を否定したいあまりに、唯一の成功までをも否定したのだ。

「わたしは失敗したのよ。貴族として失敗した……」

「あなた、これまで散々失敗してきたじゃない。ホント、今更何を言ってるのよ」

「今回のは今までと違うわ。全然違うの」

「じゃあ、何がどう違うわけ？」

――そういうことなのね。

質問しつつも、ルイズが何故ここまで落ち込んでいるかを、キュルケは大体把握していた。

禊の気持ち悪さとやらは未だ要領を得ないが、ルイズがショックを受けているのは、ルイズのアイデンティティである“立派な貴族”を自分で捨ててしまったためだ。

「わたしは、魔法が使えなくても、誰にも認めてもらえなくても、貴族であろうとしてきたわ……。なのに、わたしは自分で自分の誇りを捨てたの。貴族であることを否定したの」

ルイズは魔法が使えないという事実を、貴族らしくあろうとする心で埋め合わせようとしてきた。その支柱を禊が叩き折ったのだろう。これが計画的なものだとしたら、それは平民の発想とは思えないわねとキュルケは思った。

「同じよ。わたしからすればどっちも同じ」

「同じじゃないわ！」

追い詰められてるくせに、意固地ねとキュルケは呆れながらも苦笑した。

そしてそれでいい。少なくとも、キュルケの望むヴァリエールという敵はまだ死んでいない。だからキュルケは、ルイズに手を差し伸べてやろうと決めた。自分の人生を面白く、充実したものにするために。

「ねぇ、ルイズ。今日のミス・シュヴルーズの授業憶えてる？」

「わたしが今日も爆発させたこと？」
「そうじゃないわよ」
ルイズに睨まれた。やはり弱っていても根幹部分はルイズのままのようだ。そうでなければ助けてやる価値もない。
「ミス・シュヴルーズがあの使い魔に指摘されたわよね。ルイズが笑い者になった原因を作ったのはあなただって」
「憶えてるわよ。こっちはすごく心臓に悪かったわ」
細かくは違うが、内容としてはほぼ同じだ。平民のそれも使い魔が教師の揚げ足を取るなんて、キュルケからしても印象深かった。
「その後ミス・シュヴルーズは使い魔とルイズに謝罪したわよね」
「したわ。それがどうしたのよ？」
「それって、貴族として間違えたって、ミス・シュヴルーズ自身が認めたってことじゃない？」
「それは……」
ミス・シュヴルーズが貴族としての在り方を間違えた。それはルイズと同じじゃないのか。遠回しに、キュルケはルイズにそう問うている。そして、ルイズはその答えをすぐには出せなかった。
「あなたは、もうミス・シュヴルーズが貴族じゃないと思うの？」
「そんなわけないでしょ！　ミス・シュヴルーズはわたしに失敗を恐れるなって言ってくれたわ。間違うことは誰にでもあるって」
「そうね、わたしもそう思うわ」
しょっちゅう自分の部屋に男を連れ込むキュルケだが、全ての男がキュルケに陥落され靡いたわけではない。当然失敗したことだってある。キュルケはそれを失敗したと思っても、それで終わったとは思わない。
「だからやっぱり、あなたの失敗も同じよね」
「え……？」
「貴族として失敗したからどうなの？　誇りを捨ててしまったなら、また拾えばいいじゃない」
その相手は自分にとって運命の男ではなかったのだろう、この世

に男は他にもいるのだ。ならば、やってしまった失敗は次に生かせばいい。

失敗が悪いのではない。失敗したからと諦めることと、その失敗から何も学ばないことこそが真の間違いだ。

「キュルケ……」

ルイズの目から、さっきまでの濁りが消えた。純真な瞳にキュルケの顔が映りこむ。なんだからしくないと思ったので、オチを付けておく。

「まあ、教室壊されるのはもう勘弁して欲しいけど」

「うるさいわね！　ちょっといい話したと思ったらこれだわ！　……あ」

思わず出た自分の大声に、ルイズ本人が驚いた。この反応は、いつものルイズだ。どうやら最低限だけは持ち直したらしい。ルイズはこうでなくては張り合いがない。

「その意気よ。あなたはそれだけが取り柄なんだから」

「あう……う……」

キュルケに茶化されて自分の心境について、ルイズはこのまま受け入れるべきか苦悩しているようだ。そんなルイズに、キュルケはちょっとした安堵を得た。

――今日だけは特別よ。

そう思いつつも、きっとキュルケは似たような状況になればまたルイズを助けるだろう。ヴァリエール家との因縁はある。だけどそれとルイズを完全に重ねるつもりもなかった。

ライバルであっても憎悪の対象では決してない。むしろルイズには互いを高めあう者であって欲しいとさえ思っている。

キュルケにとってルイズは好敵手（ライバル）であり、また自分が全力で競える者であって欲しいのだ。

きっと男なら、今のキュルケの心情はこうやって言い表すだろう。

“お前がこの俺以外に倒されるのなんて認めない”、と。

「しかし、確かに気にはなるわね。あなたの使い魔」

ルイズが別人と思うまでに怯えるまでの理由は不明なままにしても、たった二日でルイズの心理を読みきって実行した結果だとしたならば、十分警戒する理由にはなる。少なくとも、ここまで人の弱さを的確に読み切る男は、男性経験が豊富なキュルケでさえ知らない。

「あいつは、もう、何がなんだかわからないわ」

なんとか立ち直っても、ルイズが頭を抱えているのには変わりがない。だから、キュルケは自分の考えをルイズにぶつけてみることにした。

「あの使い魔、本当に人間じゃないのかもね」

「じゃあなんだって言うのよ？」

「亜人よ」

「亜人って、オークじゃあるまいし。幾ら何でも……そうよっ！」

そんなのあり得ないと言いかけたルイズだったが、何か思い当たる節があったらしい。それは恐らくキュルケと同じなのだろう。彼女は口の端を釣り上げた。

「いるわよね、人間と同じ姿見をした亜人の種族が」

多くの亜人は二足歩行であっても外見は人から大きく外れている。しかし、極少数でこそあるが、一見見分けが付かない種族も存在しているのだ。

「まさか、エルフ……！？」

そう口にするルイズの顔が見る見るうちに青ざめていく。エルフとは東の砂漠に住まう種族であり、ハルケギニアでは恐怖の象徴とされている。

「それなら、これまであの使い魔が使っていた不思議な力にも納得がいくわ！」

エルフが居住している土地にはハルケギニアにおける偉大な聖人、始祖ブリミルが死んだとされる聖地があり、人々はその聖地を奪回すべくこれまで何度もエルフに戦いを挑んできた。そして、それらは全て人間側の惨敗で終わっている。

彼らは系統魔法とは全く別の、しかもかなり強力な魔法を扱うのだ。ハルケギニアではそれを先住魔法と呼び恐れている。

たった一人のエルフに百の人間で挑む必要があると言われているくらい、互いの種族には途方もない戦力差があった。

禊が先住魔法を使用できるのだとしたら、鍵や食事の紛失にだって納得がいく。

「だとしたら一番厄介だけど、それはないと思うわ。だってあの使い魔にはエルフの特徴である耳がないもの。人の姿になる魔法を使っているにしても、向こうだっていきなり召喚されたのよ。始めから人間の姿で現れるのは不自然じゃなくて？」

「そうね、だとしたら他には……吸血鬼とか」

吸血鬼の種族も人間に近い外見をしているし、エルフレベルでないにしろ先住魔法が使用できるこれまた厄介な亜人だ。

「亜人ならその可能性が最も高さそうね」

「確か吸血鬼って、人に紛れてグールを作り人を襲うのよ……」

吸血鬼の特性として、彼らは一匹につき、人間を一人だけ自分の意のままに動くグールに作り変えることができる。そうやってグールを使い獲物をおびき出してその血を吸って糧としており、元来人間の輪に忍び込むのを得意としている種族だった。

「もしあの使い魔が本当に吸血鬼なら、エルフ程じゃないにしても、大問題には変わりないわ」

「そ、そうね……まずはあいつの正体を、慎重に確かめないと。でも」

「まだ何かあるの？」

「あの気持ち悪さだけは、吸血鬼とは別物な気がするわ」

またそれか、キュルケはそう思うも、口にするのは辞めておいた。下手に刺激して、またルイズに落ち込まれては敵わない。この件だって、恐らくは禊を調べていけば判明するだろうから、ここでは保留にしておく。

「まずは明日の朝、わたしが使い魔に隠れてディテクトマジックを

試してみる。そうすれば、使い魔が何らかの系統魔法に頼っているのかはわかるでしょ」

「そうね。でも、どうしてキュルケがそこまでするの？　わたしはヴァリエールの貴族で、これはわたし個人の問題よ」

「あのねえ、わたしはあなたの隣に住んでるのよ？　あの使い魔が危険な存在なら、わたしだっていつ襲われるかわからないじゃない。それにあの平民の正体が吸血鬼だとしたら、これはトリステイン魔法学院全体の危機にもなりかねないわ」

　ただでさえここは学院と言う名の閉鎖された場所なのだ。吸血からすれば、まさに格好の狩場となるだろう。

「ああ、そっか、そうよね」

「しっかりしてよ、あなたの使い魔の話なんだから」

「わかってるわよ、そんなこと」

　こんなの少し考えればわかることだと思うのだが、そこまで考えが及ばないのは、ルイズがまだ不安定で、内心動揺しているためだろう。

　キュルケはあくまで第三者という立場から話をしているため冷静でいられるが、自分が召喚した使い魔が実は人を糧にする亜人でした、なんていきなり告げられたらそれこそ気が気ではない。

「それじゃ、今夜はうちに泊まっていきなさいな」

「どうしていきなりそうなるのよ？　ツェルプストーの部屋に泊まるなんて、冗談じゃないわ！　そんなの末代までの恥よ」

「こっちだって、泊めたくて泊めるわけじゃないわよ！」

　というか恥って何よ恥って。本当にプライドの高い娘だわ。それでも怒って放り出さないだけ、ルイズよりは大人の対応ができるキュルケだった。

「あれが、もし吸血鬼なら、あんた今夜グールにされかねないわね」

「う……」

「最悪、明日部屋で干からびてるかも」

「ぐ……」

「そもそも、あんたは使い魔が気持ち悪くて逃げてきたんでしょ？　このまま部屋に戻って耐え切れるの？」

「ううううううううう」

ルイズはしゃがみ込みながら唸った。考えるべくもない選択肢だが、ルイズからすれば究極の選択になるらしい。その失礼さにやっぱり放り捨て手てやろうかしらと考え始めていたら、ルイズが立ち上がった。

「ししし仕方ないから、きき今日は我慢してあんたの部屋に泊まってあげるわ！」

「はいはい、それはどーも」

上から目線で接してプライドを保ち妥協としたらしい。面倒臭いので、その思考に合わせておいてやる。うん、これはこれでルイズが復調しつつある証なのだ。

というか、立ち直り始めると思っていたより回復が早いので、実は大した話ではなかったのではないかなんて思ってしまう。

ああもういいわ、さっさと寝てしまおう。今日は疲れた、主に精神面で。幸い、今日は恋人達との熱い予定も入っていなかった。

残り少ない今日の予定を組み上げたキュルケに、またも声をかける者がいた。ルイズだ。

「キュルケ……」

「なあに？」

「あの、今日は、その、色々と……なんでもないわ」

「本当に、素直じゃない娘だわ」

恋人を作るのに、苦労しそうな子ね。いや、外見はいいから、ころりと騙された相手が一番苦労するかしら。そうやってルイズの将来を苦笑う。

「なんか言った？」

そして、同時にキュルケは悟る。ルイズはまだ元通りになんてなっていしなし、使い魔の問題はやはり深刻化しているのだ。

今のルイズは、やはりいつも通りにあろうと強かがっているだけ

でしかなく、すぐこうやって素直で脆い面を覗かせてしまう。
「こっちも、なんでもないわよ」
――やっぱり気になるわ。あの使い魔、クマガワミソギの正体。
こうして、キュルケはルイズという主人を通して、禊に並以上の興味を抱くのだった。彼女にしては珍しく、そこに異性としての関心は含まれずに、自分でもまだ無自覚な友情を灯して。

●

禊によって貴族のプライドと心を折られかけた次の日、ルイズはキュルケに叩き起こされた。
最初こそ部屋の違いに驚いた彼女だったが、すぐ昨日はキュルケのベッドで並んで寝たのを思い出す。貴族用のベッドだけあり、二人で寝てもまだ余裕のある大きさだ。
日常とは違う環境に、ルイズの薄ぼんやりした意識もいつもより早く覚醒していく。
もう駄目だと思っていた自分を暗闇から引き上げてくれたのは、まさかのキュルケだった。
因縁のあるツェルプストー家で、いの一番に自分を馬鹿にしてくる女、それがルイズから見たキュルケの印象だ。
しかし、それが昨日のやり取りで薄れ始めている。ゼロであんな者を召喚した自分を憐れんだから？　それは何かが違う。上手くは言えないけど、ルイズは素直にそう思った。
今のキュルケはもういつも通りで、寝覚めの悪い自分を馬鹿にしてくる。腹立たしいが、下手にいたわったり心配されてないのが心地よくもある。
そんなキュルケに感謝をしていた。それを口に出すのはルイズのプライドが邪魔をしてしまい、昨日自分で作った唯一のチャンスすら、やはり自分で潰してしまった。
家柄の因縁を抜きにしてしまえば、ルイズは本気でキュルケを嫌

っているわけではない。
友達では決してないが、憎まれ口を叩きあい続け尚且つ敵よりずっと近い距離を保ち続けている仲。ルイズが認めるなどまずあり得ないのだろうけど、キュルケという少女は悪友（ライバル）であるのだろう。
口で駄目なら行動で示そう。キュルケの助けに報いるためにも、誇り高い貴族としてルイズはもう一度、己の使い魔球磨川禊に対峙すると決めた。
心こそ一晩かけて平常まで安定させられたが、ルイズの心を蝕んだ禊の気持ち悪さを克服したわけではない。だけど自分が召喚した使い魔一匹制御できなくて何が貴族だ。
――これは自分が誇りを持って貴族として生きるために、始祖ブリミルがお与えになった試練なのよ
最近自分になにか言い聞かせるのが増えているのを自覚しながら、ルイズは自分の部屋の前まで戻ってきた。後ろには制服に着替えたキュルケが控えている。
「ルイズ」
「大丈夫よ。もう昨日みたいにはならないわ」
そんな保証はどこにもないのだが、今は一人ではないという事実がルイズにとっては何より勝る力だった。鍵のかかっている扉を開け、ルイズは自分の部屋へと入る。
そこにいるのは、いつもの黒い衣服の禊だった。
「『お』『ルイズちゃんお帰り』」
「ただいま、留守番くらいはちゃんとできるみたいね。もし鍵がかかってなかったら、朝から躾が必要なところだったわ」
「『ルイズちゃんこそ、部屋を出るならきちんと戸締りしておかなきゃ駄目だよ』『ＲＰＧじゃ他人の家のタンスやツボを漁るのは基本なんだから』」
昨日の一件などなかったかのような日常会話。ルイズは禊に文句を叩きつけてやりたくなるが、唇は別の話を紡いだ。そもそも逃げたのはルイズなのだから。

「あんたが締め出さないようにしてあげたの。ご主人様の慈悲よ感謝なさい」
「『そうだね、僕は鍵を持ってないから助かったよ』『ありがとうルイズちゃん！』」
実際は鍵を閉める余裕すらなかっただけであり、禊だって鍵かかっていようがまた無視して部屋に入っていただろう。
「『それで、昨日は忠誠心溢れる使い魔を放置しちゃって』『昨日はどこに行ってたのかな？』」
「キュルケの部屋よ。昨日一晩、二人で勉強をしていたの」
ちらりと、禊はルイズの後ろに立つキュルケを見て、人差し指で自分の顎を撫でる。そして何かを納得したように頷いた。
「『意外だなあ、二人がそんな関係だったなんて』」
「はあ？」
「『平日から二人で一晩しっぽりと保健体育の勉強とは驚きだよ』『貴族は爛れているんだなあ』」
保健体育の意味はわからなくとも、どういうニュアンスであるかはわかり、ルイズは顔を真赤にして反論する。
「ななな、何を勝手にへ、へへへへ変な妄想してるのよ！　このエロ犬ー！」
「『これまたお約束な侮蔑表現だね』『でもこれだけは言っておかないと』『夕べはお楽しみでしたね』」
後ろでキュルケが額に掌をあてて、軽く頭を振っている。どう見てもこっちのやりとりに呆れているのだろう。
「ルイズ、ディテクトマジックは反応なしよ」
「そう」
けれど、キュルケはすぐ真面目な顔に戻りそっとルイズに耳打ちした。ルイズと禊が話をしている間、キュルケは禊に感づかれないようルイズの影に隠れるように小声でディテクトマジックのルーンを唱えていたのだった。
これで反応ありだったならば、禊からマジックアイテムを取り上

げて終わりで済んだかもしれないのに。そんな落胆を得ながらも、予想はしていた。

ルイズにとって、禊が亜人の一種であるのは、半ば確定事項なのだ。

「それじゃ、わたしは外で待ってるから、何かあったらすぐ呼びなさいよ」

「わかったわ」

部屋の扉を閉めてルイズは制服へ着替えをしたが、禊は大人しく今日の洗濯物をまとめていただけだった。

本当は着替えも禊にやらせたいのだが、直接的な接触を避けるため自分で行なっている。

身支を終えたルイズはキュルケを含めた三人で、食堂へと向かった。できるだけ禊と二人きりの状況にはならない。それが二人で決めた方針だ。

食堂ではまた質素な食事を禊に与えたが、今日は室内で食べるようにと命令した。自分の目が届く範囲に置いて、怪しい行動はないか様子を観察する。幸か不幸か、今日は朝食が消えるような事態にはならず、平穏に食べ終えた。

一限目は座学なので禊の観察は楽だろう。そう思って教室に入ったルイズだったが、禊共々腰を下ろした矢先、予想していな来訪者が自分の下にやってきた。

いや、その双眸は自分ではなく使い魔に向けられている。

彼にしては珍しくキザったらしさを捨てて、鼻息荒く怒りを隠そうともせず、いきなりこう言い放った。

「使い魔の平民、二人のレディーに何をした！　貴様だけは絶対に許さないぞ……！　決闘だ！」

ルイズへ朝の挨拶すらないままに、激昂したギーシュ・ド・グラモンは禊へ決闘を申し込んだのだった。

第九敗『僕はゼロの使い魔だぜ』

アルヴィールズの食堂近くの角にて、ギーシュは忙しくなく周囲の様子を伺っていた。いつになくそわそわした落ち着かない様子で、彼を横切る者達からはさぞ不審者に見えているだろう。

昨日は浮気が発覚してしまいすったもんだの末に、ギーシュと少女達の仲を禊が元に戻すと約束をしたものの、やはりどうしても信用はしきれないでいた。

禊は普通の平民ではないと薄々感じてはいるが、それでも平民は平民。そういう考えが貴族であるギーシュの根底にはある。これは何もギーシュが特別平民を下に見ているわけではなく、魔法や生活水準の明確な格差から生まれたハルケギニアにおいては標準的な社会の在り方なのだ。

とはいえ、昨日の禊には何か確信があるようだったし、もしかしたら機嫌が治ってるかも？　という気持ちも、ギーシュの願望として心の何処かにあるのも否定できない事実だった。

不安と期待をないまぜにしたギーシュが悶々として観察を続けていると、反対側から浮気の対象だった下級生ケティがやってきた。だいたい朝の食堂には、モンモランシーより先にケティがあちらの方角からやってくるという習慣を把握しているため、彼はここに隠れていたのだ。

そしてギーシュはさも今食堂にやって来たという風を装い歩き出し、偶然ケティを見つけたような態度を取って、さり気なく彼女に近付いていく。

「やあ、おはようケティ。朝から入り口で美しいレディーと偶然出会うだなんて。これは始祖ブリミルの思し召しじゃあないかな」

幾分芝居がかってはいるが、ギーシュからすれば脚色を少なくし、かつ自然と会話をする流れを作った。つもりだった。

ギーシュを見たケティは驚いたようで一歩後ずさりつつ、辛うじ

て挨拶を返す。
「え？　お……おはようございます」
この反応で、ギーシュはケティの機嫌が直っていないことを悟り、心の内で肩を落とした。全然駄目じゃないかあの平民！　なんて毒を吐くが、それを外面に出すなんて真似はしない。
「聞いておくれケティ、昨日の」
「どうして私の……。あの、急いでますので！」
ギーシュが取り付く島もなく、ケティはそそくさと食堂に入っていってしまった。これじゃあマシになっているどころか、よそよそしくて昨日よりも冷たい扱いじゃないか。
「やはり彼を信じた僕が馬鹿だったのか……？」
一人取り残されたギーシュは、ショックから食堂の入り口近くで立ち尽くしていたが、このままでは往来の邪魔になるしモンモランシーが現れるかもしれないと、食堂内へ入っていった。
実際、程なくモンモランシーはやって来て他の女子達と談笑している。彼女から離れたテーブルに座っているギーシュだが、しっかりとモンモランシーの様子は伺い続けていた。
ギーシュの友人達は昨日からの経過や、あの平民は上手く二人を取り持てたのかなどを聞いていくるが、そんなのは全部曖昧に濁しながら答えている。ギーシュにとってはそれどころではないのだ。
ケティは駄目だったが、モンモランシーはどうなのだろう。というか前者があの結果だっただけに期待なんて持てるはずないのだが、ギーシュにとっての本命はモンモランシーであり、僅かな可能性でも禊の成功に縋りたい気分だった。遠くから眺める彼女は、昨日の修羅場など嘘のように楽しそうな調子で笑っているだけに、ギーシュはより都合のいい展開に賭けたくなる。
――そう、昨日は先にモンモランシーの機嫌を直す方に傾注して、ケティは間に合わなかったのかもしれないじゃないか。いやいやそんなはずはないだろう、自分で誤解を解きにいくべきだ。だとしたら昨日の今日でどんな言い訳をすればいいんだよ。

そんな都合の良い解釈を立てつつも不安がそれを否定するという、煮え切らず終わらない思考のループを延々と続けていたが、このままでは何もしないままに授業が始まってしまう。一番最悪な選択は、何もしないまま時間だけが流れてしまい二人の溝がより広がることだ。

意を決したギーシュは、食事を終えて席から離れたモンモランシーへと声をかけた。

「やあ、モンモランシー」

「え？　どちら様？」

他人扱いだった。しかも真顔で。

もう頭を抱えてしゃがみ込みたい。一縷の望みが砕け散り、本気でそう思った。だけどここで引いたら本当に破局だ。

「待っておくれ僕のモンモランシー！」

「僕の？　何を言ってるのあなた……」

気持ち悪いものを見るような目で、モンモランシーはギーシュから距離を取る。やっぱりこっちも昨日より悪化している気がした。平民め、完全に騙してくれたな！　後でお望みどおり罰を与えてやる。でもまずはモンモランシーの機嫌取りだ。

僅かな時間で頭をフル回転させて、流れを止めないように口を開く。

「そんな怒った顔、君には似合わないよ」

「あなた、二年生みたいだけど、何処かで話したことでもあったかしら？」

ここで恋多き少年のギーシュが怪訝を得る。モンモランシーは怒っているというより、困惑しているように見えたためだ。

モンモランシーが憤怒している時は、大抵ろくに話も聞いてくれないか、一方的に怒鳴られるというケースが多い。けれど今はそのどちらでもなく、どうしていいのかわからないという顔をしている。

「それは酷いな、これまで沢山の時間を共に過ごし、愛の言葉を紡ぎ合った仲じゃないか」

「え……？」

やはり変だ。モンモランシーの顔が、血の気の引いたように青くなっている。これは怯えの色だった。これにはギーシュもわけがわからない。

モンモランシーをかなり怒らせてしまったのは昨日ワインをかけられてよくわかっているし、拒絶されるのは致し方ないと思う。それでもこれは変だ。拒絶は拒絶でも、これではまるで恐いから近付きたくないみたいじゃないか。

「わたしの憶えている限り、あなたと話すのはこれが初めてのはずよ」

「……本気で言っているのかい？」

今度青くなったのはギーシュだった。まず彼は混乱し、頭で状況の整理を試みる。だけどやはりわからない。何がどうなれば昨日の修羅場から、こういう展開に行き着くのか。

だけど、モンモランシーが次に放った一言が、ギーシュに最悪の展開を想起させた。

「ミスタ、あなたは誰？」

はまってはいけない歯車が、カチリと嵌る。この困惑はモンモランシーだけでなく、ケティも同じだったんじゃないだろうか？　だから碌に話しもしないまま、怒った風もなく逃げていったのでは？

それはつまり、二人が揃って、ギーシュを忘れてしまっていることを意味していた。

背骨が氷柱にでもなかったんじゃないかという悪寒が、ギーシュに走る。そう言えば、昨日、あの平民は何と言ってギーシュと約束を交わしていた？

――『お詫びとして僕がさっきの二人と君の仲を戻してあげるよ』

ギーシュはある答えに辿り着いた瞬間、駆け出していた。その鬼気迫る勢いに、周りにいた他の貴族が思わず気圧され道を開ける。

「……ちょっと！　なんなのよ！」

当事者であるモンモランシーすら置き去りにして、ギーシュが向

かったのは教室だ。ギーシュは朝からルイズの雰囲気がどうにも重々しかったので声こそかけなかったが、モンモランシーだけなくあの使い魔についても少しは注視していた。だから彼女らが先に出て行ったのは知っている。

居た。何が楽しいのか、昨日と同じ笑顔の平民がルイズの隣で座っている。やはりルイズからは重苦しく近寄りがたいオーラが漂っているようだったが、もう関係ない。

ギーシュは、力の限り禊を怒鳴りつけた。

●

ルイズは、突然やってきて怒りをぶちまけるギーシュと、それを軽く受け流している禊を交互に見ているだけしかできなかった。

これは何がどういう話なのだ。事件の全容を知らないルイズにとっては、降って沸いた緊急事態である。いきなりこれで取り乱すなというのが無理な話だった。

「『やあ、おはようギーシュちゃん』『朝から決闘者（デュエリスト）気取りかい？』『残念ながら僕の特製“魔轟神”デッキはここにはないぜ』」

「二人に何をしたんだと聞いている！」

「『人の話はちゃんと聞いておくべきだぜ？』『僕は宣言通り、あの娘達の関係を元通りに戻（なお）してあげただけさ』」

「ふざけるな！　それでどうしてああなるというんだ！」

「『二人の記憶がギーシュちゃんと出会う前に戻れば』『ギーシュちゃんがどれだけ浮気をしても、あの娘達が裏切られ傷付くことはなくなるだろう？』『花は摘まなければ世話をする必要もないのさ』」

話を聞きかじっているだけで、嫌な予感が沸々と沸き上がってくる。そのためルイズは禊に説明を求めたのだが、そんな余裕すらもギーシュは与えてくれやしない。

「ちょっと、わたしがいない間に、あんた何をしているのよ」

「やはり……。君、自分が何をしたのかわかっているのかい？」
「『何をしたかの説明を求められて』『僕はきちんと答えていると思うんだけどなあ』」
「そういう問題じゃない！　君はマジックアイテムを使って貴族の記憶を消したのだよ！」
　記憶を消した！？　記憶を操作するマジックアイテムともなれば間違いなくご禁制の品であり、相手が貴族ならばとんでもない重罪だ。
　――たかが半日放置していただけで、どうしてこんな大事件が勃発しているのよ！
「『別にマジックアイテムなんてファンタジーの面白アイテムに頼ってはいないけど』『それは言うだけ無駄かな』」
　マジックアイテムを使っていない、その言葉にルイズの心臓がドクンと高く打たれた。ならつまり、禊が二人の女の子にかけたのは、純粋な魔法ということになるのではないか。
「大事なのはどうやったのかではなく、何をしたかだ。貴様の罪は重いぞ」
「『約束を果たしたのに横紙破りみたいな扱いをされるなんて』『僕が政治家なら遺憾の意を表明しているよ』」
　人の記憶を操作するという行為を実行しておきながら、禊は悪びれもせず平然としていた。さらに、愛嬌のあるいつもの笑顔でギーシュを嘲笑うかのように口を開く。
「『僕は悪くない』」
「貴様……！」
　ギーシュの怒りが頂点に達し、薔薇の杖を禊へと突きつけるが、歯を食いしばって魔法の使用は抑えた。代わりにギーシュは決闘についての続きを投げかける。
「今日の昼休み。ヴィクトリア広場で君を待つ。逃げることは許さない」
「『おや』『僕なんかのためにお昼まで猶予をくれるのかい？』」

「勘違いするな。君が受ける罰を、貴族の誇りを汚した報いを！より多くの者達に知らしめねば、僕の気が済まないのだ！」

ナルシストで格好付けたがりなあのギーシュが、許せないからという理由で人目の集まる時間と場所を選ぶ。そんな彼の怒りがどれ程のものであるか、想像に難くない。しかし、

「ちょっと待ちなさい。わたしの許可もなく、勝手に話を決めないで」

まだその正体が何者なのかすらよくわかっていない禊が、ギーシュと決闘するなんて危険過ぎる。しかしルイズが知らぬ間に生じた渦は、彼女が割って入ったくらいで収まるものではなかった。

「ルイズ、君は知らないのだろうけど、この平民は君の誇りまで汚しているのだよ」

「それはどういう意味？」

「君の使い魔は、彼女達の記憶を消すのに、ご主人様にかけて誓うと言ったのさ」

「なな、なんですって！」

主人と使い魔は一心同体であり、使い魔の失態は主人の失態となる。それだけでもルイズには大打撃には違いないが、禊はギーシュとの約束にわざわざルイズの存在を出していたのだ。禊が一方的に誓っただけとはいえ、禊が自信を持って記憶消去をしたというのなら、それはルイズが同等のことを同様の態度で行ったのに等しくなる。

ルイズはあまりに酷い急展開に、目の前が真っ暗になった。

「だが、僕はこの罪で、ルイズを責めるつもりはない」

「え？」

「君が認めようが認めまいが、この平民は君の使い魔なのだろう。だけど彼は特異過ぎる」

怒り心頭のギーシュなのだが、禊の異常性もまた少なからず感じ取っているようだ。そうでなければ使い魔との連帯責任を問わないなど言うはずがない。

「それに、この平民が僕と約束をしたのは、使い魔召喚の儀式を行ってからまだ二日だ。たったそれだけの時間で、彼を躾けるなんて君には、いや誰にもできやしないだろう」

軍人の息子である彼のプライドは、貴族の中でも殊更高い部類に入るはずである。そんなギーシュが、平民一人を制御できないと認めるような言葉を発した。

何を隠しているか定かではない危険な敵に、それでも立ち向かい記憶を消された女の子達を守るとギーシュは決意している。これは、貴族としてあるべき姿ではないだろうか。

それだけに、ルイズにかかっている責任は小さくないのだと彼女は自覚した。きっと、この決闘は止められないのだろうとも。

「僕は貴族としてその平民に罰を与え、モンモランシーとケティの記憶を取り返す。この杖にかけて！」

ギーシュが一輪の薔薇を掲げ、周りの生徒達は皆何事かと彼に注目していた。貴族の誇りと尊厳をその力で以って示されることになった平民は、やはりいつもと同じ笑顔で人事のような返事をする。

「『愛する者達と自分の誇りのために戦う貴族の自分格好いい！』『そんなギーシュちゃんの自己陶酔を守るために戦ってあげるよ』『君の中二病にかけてね』」

「何とでも言うがいい。君の悪逆非道を裁くのは、あくまでヴィクトリア広場でだ」

禊の減らず口にギーシュはより冷たい視線を投げかけるが、これ以上の問答は無駄であると悟っているのか、そのまま背を向け去って行った。

その背を見つめる禊は広げた掌を天に向け首を横に振るばかりだ。あの使い魔のことだ、あくまで自分は悪くなくて、勝手に向こうが怒りをぶつけているだけとしか見ていないのだろう。

「あんたはどこまで正気なの？」

「『僕はどこまでいっても過負荷（ぼく）さ』」

「……本気で決闘するつもりなのね」

おちゃらけてこそいるが、禊はわざと決闘になるようギーシュを仕向けているのではないか。どうしてそうなったかの経緯は知らないが、そうでもなければわざわざ部分的に記憶を消すなんて真似をするわけがないだろう。

「『ルイズちゃんはまさか、僕を心配してくれてるのかい？』『ならそれには及ばないよ』『だって僕が勝てるわけないんだから』」

誰にも勝ったことがない。禊が召喚された日に自信満々に言っていたが、あれは本当だったのだろうか。もうこの使い魔の語る話は、まともに聞くだけ馬鹿を見るとしか思えないけど。

「『なんてったって』『僕はゼロの使い魔だぜ』」

「だったら好きに戦って、惨めに負けてきなさいよ！」

使い魔にゼロ扱いされたルイズの頭は真っ赤になり、彼女は声を張り上げた。ゼロというフレーズは、この最低な使い魔を召喚するような者が自分なのだと、嫌でも感じてしまうのだから。

今やルイズにとってゼロというコンプレックスは、禊の召喚前よりも遙かに大きくその過負荷（マイナス）を増していた。

「だけどその前に、昨日あれから何をしたか、全部わたしに説明しなさい！」

それでも、ルイズはもうこの使い魔を投げ出すつもりはない。昨日の夜、自分の誇りのため、どれだけ最低でもこの使い魔から逃げないと誓ったのだ。遠くの席からキュルケがこちらを見て頷いている姿が見えた。

「『説明するより先にもう一度断っておくけど』『僕は悪くないよ』『なにせギーシュちゃんの浮気（マイナス）を、僕が台無し（ゼロ）にしてあげたんだから』」

それから教師が教室に入ってくるまで、ルイズの質問が雨荒らしのように禊へ叩きつけられ、事件のあらましを理解したルイズからはすっかり血の気が引いているのだった。

こうしてルイズは決闘が始めるまでずっと、主人としてこの事態をどうやって収めればいいのかという答えの出ない問題に悩まされ

続けることとなる。

第十敗『螺子伏せてあげるよ』

禊を当事者として今朝起きた事件を聞いたシエスタは、卒倒しそうな恐怖に身を苛まれていた。

「貴族の方と決闘ですって!?」

そんな大問題を引き起こした当事者の禊は、平常心のままに器のスープを掬っては自分の口に運んでいく。この食事を終えたら広場で貴族と決闘をする者の態度とは、とてもじゃないが思えない。

「『それで今は決闘準備（デュエルスタンバイ）をしているのさ』」

「スタンバイって……」

「『僕の国にはね』『腹が減っては戦はできぬという、それ普通だよとしか思えない残念な格言があるのさ』」

要は決闘の前に腹ごしらえしているだけだった。特別に何かをするわけではなく、いつも通りの生活に、いつも通りじゃない決闘という非日常が組み込まれている。

「気持ちはわかるが、いくらなんでもそりゃあ無茶だろおい!」

禊が決闘をするという話を聞きつけて厨房からすっ飛んできた貴族が嫌いなマルトーでさえ、何とか彼を止めようとしていた。

どれだけ貴族に嫌悪を抱いたとしても、勝つ術がないから嫌味を言うだけに留まり、貴族のために働き続けるのが平民という身分なのだ。

金銭や武装で力を蓄えた平民とて、やはり真正面から貴族に反旗を翻そうとする者はいない。だと言うのに、ここにいるただ一人の例外は――

「『だってあいつら』『ムカつくでしょ?』」

――たったそれだけ?

シエスタは禊を止める言葉を失った。

ムカつくから、気に食わないという理由だけで貴族に逆らい戦うというのか。

無謀を通り越して、滑稽な物語の登場人物を見ているような気持ちになっていた。だけどこれは本や舞台などではなく現実だ。冗談みたいな話をこの少年は実行しようとしている。

「『それにしても酷いよねー』『僕は貴族様の恋路を手伝ってあげただけなのに』」

昨日禊は貴族の小瓶を踏みつけたのをシエスタは近くで見ていた。あの行為によってギーシュが怒りこちらに近寄った時は、自分がやったのではないのに泣いて逃げ出したいと思ったが、どういうわけなのか小瓶は無傷のままだった。そうして何とかあの場は収まったと思ったのに、貴族という油にさらなる火を禊が注いでいたようだ。

「あれから、ミソギさんはどうしたんですか？」

「『あの女の子達の』『ギーシュちゃんに関する記憶を消してあげただけだよ』」

厨房の皆が絶句し、禊を凝視した。それでもやはり、禊は何食わぬ顔で美味しそうに昼食を頬張っている。

「あなた……殺されちゃうわ……」

「『心配しないで』」

「しないでって言ってもよ」

常軌を逸している禊の行動だが、本人にとっては日常の延長線上に過ぎないとばかりに笑顔を振りまく。

シエスタはもう知っている。この綺麗な笑みは、人を楽しませる言葉と、人を恐怖に突き落とす言葉を見境無く紡ぎ出すことを。

「『高慢な貴族達に』『決闘という単語を聞くだけで、吐き気を催すようになる戦いを魅せて来るだけの』『簡単なお仕事さ』」

簡単？　何が簡単だというのか？　マルトーはこりゃ駄目だとボヤいて自分の作業場へと戻っていった。

短いながらも色々話をしたシエスタからすると、禊の態度があまりに普通で、やっぱりこれから決闘に赴く者とは到底思えない。貴族の記憶を消したという悪行も、平民たる厨房の者達からは想像できるような範疇を超えてしまっている。

そして皆が困惑していようとも、昼食を食べ終えた禊は両手をポケットに収めたまま厨房を後にした。

シエスタは勇気を振り絞り、自ら処刑場へと歩む禊を止めようと後を追う。しかし部屋から抜けて禊が共にいたのは、シエスタにとってはまさに恐怖の対象となっている貴族だった。

「『おやご主人様』『まさか使い魔の迎えに自らやって来てくれるとは思わなかったよ』」

「最後通告に来たのよ。あんた、本当にやるの？」

禊の前に立つのは彼の主人たるルイズであり、彼女こそがたった一人禊を押し留められる者だろう。そのルイズがキツい目付きで禊を見据えて問う。

「『やるよ』『これからね』」

「そう。なら付いて来なさい」

「『うん』『エスコートありがとう、ルイズちゃん』」

それは主従と呼ぶには少々ちぐはぐで、温度差のあるやり取りだった。ルイズは短く禊の意思を確認しただけで、あれこれと忠告や説教をすることもなく、彼を先導して歩き出す。もう、そんな地点は過ぎ去ってしまっているのだろう。

「あの！　待ってください」

禊とはまだ出会ってたった二日だけど、その人懐っこくてひょうきんな姿は、もうすっかりとシエスタの記憶に焼き付いている。

不思議な少年だ。何を考えているのかもさっぱりで、未だにどうして昨日ギーシュの小瓶を踏みつけたのかもわからない。たとえ時間をかけたとしても理解できそうになかった。もしかしたら本当にムカついただけで、理由なんてないのかもしれない。

自分とはあまりに違う、だけど同じ平民。そんな禊が、シエスタはどうしても気になった。

それに自分でもわからないけど、シエスタは禊がこれからどうなるかを見届けねばならない気がする。

ただシエスタが初めて禊と出会った時から、ギーシュという貴族

がずっと絡んでいたかもしれないし、この二日間で少しばかり彼の面倒を見てきたための情かもしれない。
明確な答えなどないのだけど、シエスタは勇気を出して自分に背を向ける二人を呼び止めた。
「わたしも、一緒に行ってもよろしいでしょうか？」

●

ヴェストリ広場には、ギーシュが前もって声をかけた集めた貴族達でごった返していた。彼らは一様にこれから始まる決闘という名のショーを期待して、沸き上がっている。
ギーシュはそうして意図的に作られた輪の中で、一人眉一つ動かさないまま俯き、その時を待っていた。その様子からはいつもの目立ちたがり屋でキザったらしい彼は見受けられない。本気の怒りを静かに燃やす男がそこにいた。
ふと、彼の正面になる人垣が割れる。来たか、とギーシュは静かに顎を上げ、怒気を孕んだ瞳でそれを睨み据えた。
歩んでくるのは三人。桃色の髪を揺らすルイズに、すぐ後ろを追従するように、彼女の使い魔である禊が視界に入り、ギーシュの目が細まる。その二人から数歩遅れて付き従うように追うのは黒髪のメイドだ。
あのメイドは食堂で禊と共にデザートを配っていた者で、初めて禊と出会った時も、彼女は禊の隣にいた。
思えば、彼女こそがこの決闘を引き起こすきっかけになったのかもしれない。ならばあのメイドには、この決闘を特等席で見守る権利があるだろう。そう思ったギーシュは、ルイズと共にギャラリーの最前線に収まった彼女について見て見ぬ振りをするのだった。
遅れてやってきて特等席を陣取ったメイドだが、今回の主賓であるギーシュが彼女について黙認を選び、もう一人の主役である禊の関係者と推測される。そのため他の観客達もジロジロと好奇にそそ

られ瞥見するだけで、彼女を咎める者はいない。
「逃げずに来たようだな」
「『ここが僕の故郷なら』『今頃朝に買ったジャンプを読んでいる頃だったろうけどね』」
どうせ逃げたとしても、見張りに送っていたギーシュの友人が無理矢理にでも引っ張って来ていただろうが、自分の意志で歩いてきた禊にギーシュは警戒を強める。
怪しげなマジックアイテムを使って少女二人の記憶を奪った男だ。何かを仕込みがあり、自分に勝算があるからやって来たに違いない。
「『ねえギーシュちゃん、一ついいかな』『決闘を始まる前に確認しておきたいことがあるんだけど』」
「なんだい？　下らない時間稼ぎなら付き合わないよ」
「『この決闘は、どうやったら負けが決まるのかな？』」
禊が右手を挙げて投げかけたのは、ごく単純な禊の質問は決闘のルール確認だった。だけど、これまで二度も禊に手痛く嵌められたギーシュは、重要な部分を聞き逃さない。
「杖を落としたら負け。それだけだよ」
「それじゃ、禊の負けがないじゃない！」
こんなのはギーシュからすれば想定していた範囲だ。あからさまなルールの抜けをルイズが指摘するも、彼は鼻で笑って返すだけ。
「口での降参を認めれば、きっとその平民は決闘の開始早々に敗北を認めるだろう。そんなのは許さない。そのために、あえて勝利ではなく敗北の条件を聞いたのだろう。違うか？」
「『ん？』『ああ、バレてた？』」
「もう君の口車には乗らない。だが安心したまえ、殺しはしない」
殺したいくらい憎らしく、また殺されて当然の相手だが、それは許されない。この決闘は、モンモランシーとケティを救う戦いでもあるのだ。
ただし、五体満足で帰すつもりだって毛頭ない。
「産まれてきたことに対する後悔を、たっぷりと味わうだけさ！」

「っひ……！」

そう言って不敵に口元を釣り上げたギーシュを見て、メイドが両手で口を押さえて短く悲鳴を上げた。それを見た近くの貴族のギャラリー達はこの後に待つショーを予想したのだろう、「貴族を怒らせるとどうなるか教えてやれ、ギーシュ！」と野次のような応援を飛ばす。

ここで禊を私刑（リンチ）にして、モンモランシーとケティにかかった魔法を解除させる。そして二人の前で、禊が行った暴虐非道を懺悔させるのだ。

それも可能なら大勢の観客がいるこの広場でがいい。そのためギーシュからして後ろになる人垣の最前に、予め二人を連れてきている。

「『これまで産まれて後悔した回数なんて』『おはようと言った数より多いぜ』」

「その減らず口も聞き飽きたよ。それじゃあ、覚悟はいいな。平民」

「『薔薇を咥えて諸君！　決闘だ！』『なんてナルシスト面白いことを、まさかギーシュちゃんはやらないよね』」

「安心したまえ、これはもはや決闘ではない。僕から君への一方的な制裁だ！」

ギーシュが手に持った薔薇の杖を振るい、花びらを一枚宙へ舞わせる。すると花びらが一瞬にして、女性型で甲冑を着込んだ人形に変わった。

「僕の二つ名は“青銅のギーシュ”。従って、この華麗なる青銅のゴーレム、ワルキューレが君のお相手をするよ」

「ミソギさん、逃げて……！」

メイドの顔が絶望にへしゃげて涙目になる。これが普通の平民の反応なのだった。

ゴーレムの一体でも召喚してやれば、まずかなり鍛えた剣士や騎士でもなければ勝負にもならず一方的にいたぶられるだけの展開になるだろう。

「僕はメイジだ。だから魔法で戦う。よもや文句はあるまいね？」
「『わお』『これは昨日やっていた錬金の応用かな』」
しかし安否を気遣われているはずの禊とは言えば、好奇の溢れる目でゴーレムを観察しているように見える。
面白くない。だが、これだって計算の内だ。
――さあかかって来い禊。お前の隠している武器を見せてみろ
「『なら僕は』『これで螺子伏せてあげるよ』」
どこから取り出したのか、禊の手には二つの金属塊が握られていた。六角形のヘッドから円筒が伸び、先端は尖りまるで針のようで、螺旋を描いた溝が掘られている。見たこともない武器だ。
「奇妙な武器を……」
「『ふうん』『どうやら、この世界には螺子が無いようだね』『とても素敵な便利アイテムなのに』」
「しかし、そんな金属程度で僕のワルキューレがやられるものか！」
ギーシュの意気を乗せるように、ワルキューレが走りだし禊へと特攻する。それでも禊は落ち着き払った様子で破顔したままだ。
「『まあ』『青銅のゴーレムに僕の螺子が通じるわけないだろうけど』『ものは試しと言うしね』」
ワルキューレが打ち込もうとする拳が禊に届くより先に、巨大な螺子がワルキューレの胴体を貫いた。穴は胴体の半分にも及ばないが、そこから亀裂が広がり身体が上下に泣き別れとなって落ち、それきりワルキューレは動かなくなる。
なんて威力だ。でも、青銅を一撃で貫く威力に戸惑いを見せているのは、ギーシュだけではなかった。
珍しく笑みの消えた真顔で、禊が自分の腕を見ている。そこで禊とギーシュは確かに見た。彼の左手の甲にある使い魔のルーンが淡く輝いているのを。
「『これはまあ』『後で調べるとしようかな』『ただの契約証代わりだと放っておいたのが幸運（プラス）に出るなんて、僕らしくもない』」
「まだだ、僕のワルキューレは一体だけではないぞ」

ギーシュは残りの花びらを使い、新たに六体のゴーレムを一度に出現させる。様子見のために一体しか使っていなかったが、七体のゴーレムこそがギーシュの真骨頂だった。

六体のゴーレムが、禊を囲むような陣形を組みながら走り回る。本来は戦闘向きではないと評価される土属性の魔法だが、このゴーレムは例外だ。ギーシュはドットクラスでこそあるが、ゴーレムの操作術は学年でも高く生徒同士なら一対一の戦いでは彼に勝てる者はそう多くない。

「行けっ！」

ギーシュの号令でワルキューレ達が一斉に禊へと襲いかかった。まずは禊の右側の二体目のワルキューレが打撃の体勢を取るも、その頭部にもう一本の螺子が突き刺さり破砕される。

「『力で敵わないなら僕の死角を狙おうという君の弱さは』『既に看破済みだ……』」

新たに取り出した二本が禊の螺子が、禊の後方から体当たりしようと身体をせり出す三体目のワルキューレに突き刺さった。

「『ぜ？』」

だが、三体目は前のめりになりながらも禊の身体に抱きついて動きを阻害する。さらに攻撃された三体目を盾のように扱い、後ろで控えていた四体目と五体目が、それぞれ両腕を掴みつつ禊を押さえつけ完全に動きを封じた。

「それがどうした、僕の狙いはこれだ」

そして仕上げとして、六体目にして最後のワルキューレが唯一武装された槍にて、禊の背を穿ち貫いた。

赤い飛沫が陽の光を受けて光るワルキューレ達の鎧を汚す。

「い、い……嫌あああああああああぁ！」

禊の無残な姿をその視界に写したメイドが絶叫したが、そんな少女一人の悲痛な叫びなぞ、大観衆の興奮した歓声にかき消されるだけだった。

第十一敗『ルイズちゃんはやっぱり』

自分が召喚した禊は吸血鬼や亜人で、強力な先住魔法を操れる。決闘となればその力と正体がわかるはずだ。ルイズはそう思っていたし、ギーシュが危なくなれば、自分が飛び込んで決闘を止めるつもりだった。なのに、まさか……。

こんなはずじゃなかったとルイズが思っても、もう遅い。禊の背に槍が突き刺さり前のめりに倒れ、その上からワルキューレ達の拳と足が打ち下ろされる姿を、ルイズは黙って観戦しているしかできなかった。

どう見ても優勢なのはギーシュであり、禊が一方的に制裁という名の暴力を浴びせられ息も絶え絶えになっている。

「もうやめて……ミソギさんが死んじゃう！」

シエスタが止めどなく涙を流し、決闘の結果を拒否するかのように首を振りたくっていた。禊が魔法を使えない普通の平民だと思っていた彼女ならこうなるのはわかっていたはずだ。

平民と貴族にはどうやっても埋められない格差がある。経済でも力でも、貴族は平民より上に立つ存在だ。これは差別じゃなくて、種別と言い換えていいだろう。

たった一人の平民が、世界のルールを変えられるものか。変わらないから六千年、ハルケギニアは貴族が世を治めているのだ。

「お願いしますミス・ヴァリエール！　止めて……この決闘を止めてください！」

――なのにどうして、わたしは自分にすがりついてくるこのメイドの気持ちがわかるの？　どうしてこんなにも、わたしは無念を感じているのよ。

ギーシュは殺さないと言っていたが、禊の正体が吸血鬼であったとしても、あの怪我では死にかねない。

それに、ギーシュが禊を殺さないのはモンモランシー達を助ける

ためであるのは明確だ。もし彼女達の記憶が戻れば、禊が殺される可能性は決して低くない。

禊が負ける。それはルイズにとって、制御不能の使い魔から解放されることを意味しているはずだ。なのに、ルイズの胸には締め付けられるような苦しさがあった。

ピクリとも動かなくなった禊をワルキューレ達が見下ろし、その手足が止まった時、自分を抑えられなくなったルイズは思わず叫んだ。

「ミソギィ――――――――!!」

気持ち悪くて、恐い、大嫌いな使い魔だ。でも、このまま彼が死ぬのを認めたくないという矛盾した気持ちがルイズに積り、そして破裂した。

この感情の正体が何なのか、ルイズ自身にもわからない。

禊が自分と同じ負けっぱなしの弱者だからかもしれないし、自分が使い魔に向きあうと決めてすぐこうなったためなのかもしれない。でも、それらがはっきりとした形になることはなかった。

だけど?

だから?

ルイズは自分の使い魔の名前を呼んだ。言葉にならないから、ただ、名前を。

背負ってきた貴族としての重責も関係ない、自分の感情にだけ従った。これはきっとルイズという少女の、とても純粋な気持ちの塊だ。

「『ん?』『どうしたの?』」

そしてそれは返された。括弧付けた、真意の見えない言葉。日常の一ページみたいなあっさりとした、今この場に置いては異常極まりない返事。

槍が刺さったままで、いつもの笑顔をそのままに、彼は身を起こす。地面に付いた手を離すと、背を大きく仰け反り、血塗れの刃先が天を向く。

槍。
流血。
嘘みたいに薄っぺらな笑顔。
ぞわりと立ち上る鳥肌。
――ああ、これよ。これが私の使い魔だわ。
魔法より理不尽に、エルフよりおぞましい。無能（ゼロ）という下限より堕した過負荷（マイナス）、球磨川禊がここにいる。

●

急所ではないが胴体を貫通した。傷口から流れた小さな血溜まりと、青銅で殴打されて曲がらない方向に曲がった腕。怒りに任せてやり過ぎたとも思い攻撃の手を緩めたのだ。
なのに、まるで屠生人（ゾンビ）のように禊は立ち上がり、ギーシュの心が乱れた。
ただ驚いただけではない。禊が二本の足で直立し直しただけなのに、その姿があまりに気持ち悪いのだ。ギーシュの心臓が早鐘を打ち始めて、酸っぱいものが胃をせり上がってきているが、口に手を当てそれは押し止めた。
こうまで肉と骨を破壊したのに、どうして禊は立っている？　まだあの笑顔を浮かべられているのだ。やせ我慢ができるような軽い傷とはわけが違うというのに！
ただの平民ではないと策を練り、覚悟して挑んだはずなのに、これはもうそういう問題じゃあない。
「『可愛い使い魔のピンチに、思わず初めて名前を呼んじゃう』『ルイズちゃんはやっぱりツンデレだね』」
「あんた……どうして？」
禊の名前を呼んだ張本人であるルイズすら、開いた口が塞がらなくなっている。直接禊に手を下したギーシュのプレッシャーは、それよりも大きい。それを知ってからずか、禊は何食わぬ顔でルイズ

と話している。
そして、折れていない左腕で禊がパチンと胸元のホックを止めると、
「ミソギさん……！」
「『僕が名前を呼ばれる度に十円貰っていたら』『僕は今頃小金持ちになってるぜ』」
折れた腕があるべき方向へと戻り、血と泥だらけだった服は新品同様に還って、突き刺さっているままだった槍さえが消え去った。
これが、ギーシュだけでなく、全員が見ている前で一瞬にして起こったできごとである。周囲からざわめきが起こるが、誰もこの現象を理論的に説明などできない。できてたまるかと思い、冷たい汗がギーシュの頬を伝う。
「何なんだ、何をやったんだ貴様は！」
「『またその質問かい？』」
「いいから答えたまえ！」
たまには別のことを聞けよという呆れ顔だが、毎回理解し難い何かを引き起こしているのは禊なのだ。聞くなと言われようがギーシュの知ったことではない。
「『そんな大袈裟な話じゃないよ』『ちょっと君に攻撃されたという事実を無かったことにしただけさ』」
「……馬鹿にしているのか？」
無かったことにした？　そんなのが説明になるとでも、本気で思っているのかこの男は。そんな冗談がまかり通るなら、この世界から事故死と殺人は消え去っている。
「どんなスクエアの水のメイジが、貴重な秘薬を使ったって、そんな治療は不可能だ！」
「『だから回復魔法とかそんなのじゃないってば』『貴族は人の話を聞かないのが美徳なのかい？』」
禊が持ち直し、右へ駆ける。その先には雲行きの怪しくなってきた決闘を眺める生徒の男がいて、螺子が無造作にその観客の胸をぶ

ち抜いた。
「うぎぁ！」
「ひっ……！」
「な、なんでこっちに！？」
さらに襟はその螺子を引き抜くと、その生徒には螺子を刺された傷がなかった。白い制服にはシミ一つなく破れた形跡も残ってはいない。さらに、その生徒は突っ張るように自分の両腕を前に出した。
「なあおい、どうして急に暗くなったんだ？　皆どこに行ったんだよ？」
周囲を手で探るように歩き回る少年の足が近くにいた女生徒に引っかかり、そのまま彼は倒れた。それでもまだ、少年の腕はもぞもぞと地面をまさぐったままだ。
「痛え！　おい、今のは何だ？　俺は躓いたのか？　なあ、声が聞こえてるんだ。誰かいるんだろ？　隠れてないで出てきてくれよ！」
ここに来てようやく、皆が少年に起きた異常の正体を把握し始めた。そして少年の望みとは裏腹に、その事実に恐怖して皆が少年から離れていく。
「『とまあこのように』『そこら辺につっ立っていた、生徒の怪我と視力を無かったことにしてみましたー』」
「視力……？　お前が消せるのは怪我だけじゃないのか？」
「『過負荷（マイナス）たる僕の欠点（とくぎ）が、そんな幸福（プラス）のわけないだろ？』」
「なあ、皆いい加減に出てきて」
「『今いいとこなんだから』『静かにしてて頂戴』」
這いつくばる少年の背にまたも螺子が突き刺さり、少年から二度と声が発せられることはなかった。
「『じゃあ静かに（しゃべれなく）なったので改めて』『現実を虚構（あらゆることなかったこと）にする』『それが僕の大嘘憑き（オールフィクション）だよ』」
ギーシュの思考は現実に追いつけず眩暈がして、そのまま倒れそうになった。左手で頭を支えて、これはプライドとモンモランシー達を賭けた決闘だと堪えたが、いっそ気を失って何もかも忘れてし

まった方が幸せだと本気で思う。

「全部……」

ギーシュが視線をズラした先にいるのは隣り合うモンモランシーとケティである。あの二人は記憶を無かったことにされたのだろう。信じたくない。けど全ての辻褄が合致してしまう。割れたはずの小瓶も、モンモランシーにかけられたワインも、ケティに叩かれた頬も、現実（なにもかも）を無かったことっされてきたのだとしたら――

「全部、その力だったのね……」

禊の主人であるルイズが、あっさりとその理不尽を認めた。それがギーシュの認識を後押しする。

そう言えば、ルイズの食事だけが無くなったという事件を聞いたことがある。これも禊の仕業だったのだろう。

受け入れたくない事実がギーシュの精神を縛り付けていきながら、彼の思うことはシンプルにたった一つだった。

――こんなの、勝てるはずがない！

●

ルイズよりも小柄で透き通るように鮮やかな青い髪の少女、タバサが広場で決闘を観戦していたのは禊に興味があったためではない。普段ほとんど感情を表に出すことのない自分でもきっと驚くようなものが見れるはずだ、と親友であるキュルケに誘われたからである。

それも話半分でしか聞いておらず、決闘が始まってもタバサは立ったままその目線は図書室から借りてきた分厚い本に落とされたままだ。

どうもキュルケが件の使い魔に興味を抱いているのは今日の様子から薄々感じ取っていた。それがいつものように恋愛対象として見ていなかったのは珍しくもあるが、相手は平民なのでそこまで至らなかっただけと一旦片付ける。それより、どうも彼女はルイズを心

配している節があった。
　キュルケは普段こそノリが軽くしょっちゅうルイズをからかって遊んでいるが、クラスの誰より人を見ており、心の機微に敏感であるのを知っている。キュルケの惚れっ気の多さは、そのまま自分を磨く原動力として機能していた。
　そんな彼女が必要以上にルイズを気にかけているのなら、それ相応の理由があって、根っこにはあの使い魔が絡んでいるのだろう。
　だとしても、それがタバサの気を引く理由にはならなかった。禊が瀕死の重症から、理不尽な復活を遂げるまでは。
　螺子とかいう物珍しい武器を使ってワルキューレの一体を瞬殺したのは騎士として僅かに注視したが、すぐに戦い慣れているだけだとタバサは分析し興味を失った。
　しかし、大嘘憑き（オールフィクション）と命名されていた力はまるで別物で、どこまでも例外だ。
　あらゆる事象を無かったことにしてしまう、にわかには信じがたい、まさに嘘みたいな能力（スキル）。その荒唐無稽さに、タバサの瞳は禊に釘付けだった。読んでいた本の内容もすっかり吹き飛んでしまっている。
「タバサ、あの大嘘憑き（オールフィクション）って言うの、一体どういう属性の魔法かしら？」
「わからない」
　そうとしか言いようがなかった。まずそもそも魔法かどうかさえ疑わしい。その幼い身体とは不似合いに、数々の死線を潜り抜けてきたタバサでも、そんなデタラメな魔法を使う者とは出会ったことがない。もしそんなことが可能な技法を強いて挙げるなら、先住魔法と後はもはや失われてしまった伝説の系統である虚無くらいではないだろうか。
　いや、タバサにとって大事なのは、あの力が何の系統でどういった原理で発動しているのかではない。そのどちらも、まず確かめねばならない前提に付随するおまけみたいなものだ。

――もし、あの言葉が真実（ほんとう）なら……。

タバサには使命がある。それこそたとえ、己の人生、その全てを捧げてもやり遂げねばならない生きる目的が。

大嘘憑き（オールフィクション）の効力が本当なのだとしたら、タバサの人生は大きくひっくり返りかねないのだ。

「ミソギ、君にもう一つ尋ねたい。モンモランシー達の記憶を奪ったのも、その大嘘憑き（オールフィクション）とやらを使ったのかい？」

「『せいかーい！』『初めて的を射た質問を聞いたよ』『お利口になったねギーシュちゃん』」

その小さなやり取りにタバサの目が細まり、ただでさえ白い肌に青みが差した。物静かな彼女の内に、煮えたぎるようなどろどろの感情が渦巻き始めた。

あの大嘘憑き（オールフィクション）は、タバサにとってなくてはならない存在だ。しかし、

「何かあるのは確信してたけど、まさか、これ程のものだとは思わなかったわ……。あまりに酷過ぎて、本当なのかすら疑わしいなんてね」

「あ：：れの真相がどちらにせよ」

親友のぼやきもどこか遠くに聞こえるが、確かなものが一つだけ、タバサの胸に迫っていた。彼女が内包する、絶対に触れてはいけない不可侵の底にある爆薬。禊はそれに火を点けた。

「他人の身勝手で人の心を操るのは、絶対に許されない」

第十二敗『今日から僕達は』

何度も。何度も。何度も。

ワルキューレ達が禊を攻め続ける。新たに持たせた槍で刺し、剣で斬りかかる。鮮血がワルキューレと広場を汚し、生徒達から悲鳴が沸く。

その声は最初の歓声に比べて可愛いものだろう。なんせ、決闘の巻き添えを恐れた半数以上はもう広場から逃げ去っているのだから。

残った者達は、禊の発する気持ち悪い雰囲気に感化され、凍りついたように足がすくんで逃げることも叶わなくなっている。

禊の付き添ってきたメイドすら、涙は枯れて禊の気持ち悪さに気圧されていた。彼の仲間ですらこの様なのだ。これと相対しているギーシュは、もう生きた心地がしていない。

「『ああこれは肝臓がぐっちゃくちゃかなー』『胃の内容物が内蔵に溢れ出しちゃったかも？』」

普通の人間ならとっくに死んでいる怪我でも、遊び半分の軽い声で解説をする禊にギーシュは寒気がした。そして手が緩んだと思えば、与えたダメージが即座に無へ帰る。

そういう不毛な繰り返しに、いつしかギーシュの攻めは止まっていた。

――攻めなければ禊がこっちへ来る。だけど、何をしたってもう同じだろ。何から何まで、無かったことにされて終わりなんだぞ！

何かすれば疲弊するのは僕だけじゃないか！

ギーシュの練ってきた策の全ては、大嘘憑き（オールフィクション）の前に何の意味も持たなくなっていた。

ワルキューレが禊を攻撃すればするだけ、彼の狼狽は膨らみを増していく。

決闘が始まったころの勇ましさなんて、ギーシュはとうに失っていた。今はただ死にたくないという生存本能が、彼の意識を支配し

ている。
「来るな……こっちに来るんじゃない！」
「『僕達って今、何してるんだっけ？』」
ギーシュは父が語っていた、“命を惜しむな、名を惜しめ”という言葉が如何に言葉だけあるかを理解してしまった。普段の彼がキザったらしく振舞うのは父からの教えを守り、自分がドットのメイジであっても貴族らしく振舞おうとする表れだった。
何より、彼の生き方のせいで見えにくくなってこそいるが、父の教えを尊重し守りぬこうとする彼には困難に立ち向かう勇気がある。そうでなければ、根は小心者のギーシュが正体不明の禊を相手にしてまで、モンモランシーとケティを救おうとるわけがないのだ。
「くそ、何もかも無かったことにするだって？　そんなの卑怯じゃないか！」
「『貴族は魔法を使うんだろう？』『なら負完全と呼ばれた僕は過負荷を使っただけさ』」
そんなギーシュの才能は、球磨川禊という規格外の過負荷の悪意に晒され、昨日のルイズと同じく台無しにされてしまった。
涙目になりながら、ギーシュはワルキューレに自分を守れと指令を出す。“戦え”から“守れ”に変わった命令が、彼の心に憑いた折れ目を如実に示していた。
「『折角ギャラリーを集めたんだろ？』『無限ループじゃ飽きられちゃうぜ』」
それはたった数秒の早業だった。ギーシュの戦略によってワルキューレが禊の背後を襲った時とは比べ物にならない速さで、全てのワルキューレが地面に縫い付けられるように螺子を差し込まれた。
「何ぃ……！　僕のワルキューレが！　う、ううう嘘……」
「『嘘だろ？』『さっきは力ずくで囲み、槍で倒せたじゃないか！』『とでも言いたいのかい？』」
ギーシュが言わんとしていたことを、禊が先回りした。そんな一言で、雪玉が坂を転がり巨大化するように、ギーシュの恐怖がその

濃度を増す。

「『なんてことはないよ』『絶体絶命のピンチに陥って、僕に眠っていた真の才能が覚醒したのさ』」

そんな都合のいい展開があってたまるかとギーシュは思う。それを口に出すには、ギーシュの歯の根はあまりに噛み合わず、歯と歯がぶつかる音を鳴らし過ぎていた。

「『それとも』『乙女の叫びによって新たなる力を得た』『の方が思春期によくある病気っぽくて格好いいかな？』」

――こいつ、わざと手を抜いていたな！

気分よく禊を叩き伏せ、自分に悪人を裁く格好良い貴族という理想像を存分に味合わせて、それが全部仕組まれたものだと思い知らされた。ギーシュは敵の手の上で踊らされていたのだ。

これによって、折れ目だらけになっていたギーシュのプライドは、握りつぶされたようにしわくちゃになった。もう元には戻せない紙くずに。

敗北感に打ちひしがれたギーシュの膝が折れ、地に付いた。

「ま……」

「『参ったなんて言わないよね？』『なんせ君は僕を一方的に四十六発も傷めつけたんだから』『四十六億回は不幸（マイナス）になってもらわないと』」

球磨川禊が近寄ってくる。過負荷（マイナス）が這い寄ってくる。遅くもなくて早くもない歩調で、一つ一つ死の宣告を刻むように。

肌が凍り、総毛立つ。春なのに、まるで真冬に戻ったようだ。

涙でぼやけて禊の黒い服が滲み広がって、なんてことない平民が、ギーシュにはもう悪魔にしか見えなくなっている。

「『それにこの決闘』『降参は負けに含まれないと言ったのは誰だっけ？』」

「それは……」

敗北の条件を予め確認したのはこのためだったのだ。自分が決闘から逃げるためではない、ギーシュを決闘から逃さないために仕組

んだ禊の罠だった。
もう禊はすぐそこまで来ている。ここまで念密にギーシュを背水へと誘導したのだ、下手な言い訳なんて通用しないだろう。
「それなら！」
ギーシュはわざと、自ら杖を手放した。もう自分が助かるならばそれでいい。生き延びるためなら貴族の誇りなんて今は邪魔なのだ。
そんな逃避（マイナス）の意思は、されど禊の練り上げられてきた過負荷（マイナス）に通ずるはずもない。
「『おっと』『大事な杖なんだから手放しちゃ駄目じゃない』」
杖を手放した右手の甲に螺子が突き刺さり、だけどギーシュの手にあるのは螺子ではなく一輪の薔薇だった。
自分から杖を手放して、メイジであることを否定しようが、それすら無かったことにされる。
「そんな……これじゃあ」
負けられない。
勝てないとわかっているのに負けることも許されない。そして禊は、もうギーシュを螺子伏せられる距離にいる。
「ゆ……許してくれ、僕が悪かった！」
「『そんなの知ってるよ』『だから最初から言ってるじゃないか』」
薔薇の刺を気にせず、ギーシュは両手を組んで禊へ敗北を懇願する。そんなギーシュに禊は笑いかけた。嘘みたいに愛嬌溢れる、嘘の笑顔だ。
「『僕は悪くない』」
ギーシュの右太ももを、螺子が抉る。
戦いらしい戦いなんて、ギーシュには子供同士の喧嘩しか経験がない。禊を痛めつけるための策は練ってきたが、その逆なんて考えもしなかった。
そんなギーシュが、異物で肉が突き破られる痛みに耐えられるわけがない。
「ぎゃあああああああああああ！」

悶えてのた打ち回るギーシュの絶叫が、決闘場を支配した。
禊を倒す覚悟はあっても、禊に倒される覚悟なんてない。常に勝者（メ イジ）として生きてきた無自覚の甘さだ。
「痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛いぃぃぃ！」
だけど這う。それでも這う。鮮烈な痛みが、より深淵な恐怖を喚び起こす。急激にリアルを帯びた、死への恐怖だ。
後ろを見るな。見ればそこには笑顔の悪魔がいる。
死へと背を向け、助けを求めて手を伸ばす。前に群がっているのは人だ。悪魔ではない。自分と同じ人間だ。だったら助けてくれるはず。
「助けてくれ！　殺される！」
しかし人間は皆ギーシュから目を逸らす。だって人間だから、悪魔が恐いから。
人だかりが減って、そこには決闘を止めようとここへ来たのだろう、教師という人間もいた。でも同じだ、人間には変わりがないから、悪魔は恐い。
足音が聞こえた。すぐ近く、人間ではない者の足音だ。
悪魔が来る。
悪魔が来る。
悪魔が来る。
ギーシュを殺すためにやって来る。
泣いて、助けを求めてギーシュは這いずり逃げた。砂利とズボンが擦れる音がする。手や顔が土塗れだ。自分がどれだけ惨めな姿になっているか、ギーシュには思う暇などない。
ギーシュの手が、人に届いた。それは彼の想い人、モンモランシーのスカートだ。自分が守りたくて、禊と決闘した女の子だった。
「助けておくれ……モンモランシー！　僕には君が必要なんだ。誓うよ！　もう君しか見ない。絶対だ！　君さえいればいい。愛している！」
スカートを引っ掴んで、よじ登る。救済を求めて、愛しい人の名

を叫ぶ。なんて単純な話だったのだろう。生きてることはそれだけで素晴らしい。好きな子と一緒に生きられれば、それ以上に幸せなことなんてなかった。たったそけだけ。

ギーシュはそれにようやく気付いたのだ。

「わたしに触らないで！」

モンモランシーがギーシュを突き飛ばす。尻餅を付いたギーシュが、唖然として彼女を見つめる。そして再び弱々しく彼女の名を呼んで手を伸ばすが、それも叩かれてしまう。ギーシュはモンモランシーに拒絶されていた。

「気持ち悪い！　勝手にわたしをここに連れてきて！　何なの？　誰なのよあなた!?　これ以上、わけのわからないことに巻き込まないでよ！」

「待っておくれ、行かないでモンモランシー！」

走り去るモンモランシーに手を伸ばしたとて掴むのは虚空ばかり。半分に欠けた想い出では、どれだけ求めても残り半分を埋めるには至らない。空を握った拳は無念で、大地を叩いた。

「『あーあ』『また振られちゃったね』『せっかくやり直させてあげたのに』」

「ひっ……！」

襖の声にすくんだギーシュの身を、新たな螺子が皮膚を引き裂く。声にもならない声が漏れて、近付けたはずの人間達はまた遠ざかる。教師にも広場から逃げ出す者が現れた。

不意の痛みだけじゃなく見えないという新たな恐怖を傷と共に刻まれたギーシュは、悪魔の顔を見た。やはり最初と変わらない、だけどもう恐怖の象徴でしかない笑顔だ。

手にも変わらず二本の螺子。あれがまた突き立てられるのか。今だってもう死にそうな程痛いのに、まだ死ぬような痛みが増えるのか。

見えていたとしても、あるものは恐怖だけだった。

――次だ、次が来る。来てしまう。もう嫌だたくさんだ。もう…

…！

ふっと、ギーシュを影が覆う。ギーシュに映るのは黒いマントと桃色がかった長いブロンドの髪だ。ギーシュと褄に割り込んだのは、褄をこの学院に召喚した彼の主人。

「ミソギ、あんたの主人ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールが命じるわ。今すぐその武器を捨てなさい！」

「『最近の決闘ってのは横槍も許されるのかい？』」

「何が決闘よ！　これ以上、続けるならわたしが相手になるわ……！」

この悪魔になんて勇ましい啖呵を切るのだろうとギーシュは思う。だけどルイズの身体は心を正直に体現するように震えていた。これじゃあ悪魔の生贄が一人増えただけだ。

下手すると乱入者にかこつけて、自分への罰を増やすかもしれない。仲間が増えても、それがルイズ（ゼロ）では何の助け（プラス）にもならないのがありありと感じ取れた。

「『もー大逆転の雰囲気台なしじゃないか』『空気読んでよね、ルイズちゃん』」

「それがどうしたの。こんなの誰も望んでないわよ！」

声も足も震えて、それでもルイズは勇ましく悪魔の前に立ちふさがる。二人の戦いが始まるのも時間の問題だろう。そうすれば、ギーシュの拷問もまた再開される。今のうちに少しでも逃げて離れないと。

一度折れたギーシュの思考はどこまでも負け犬のそれで、しかし続く褄の台詞はそんなギーシュの逃亡すら止めるものだった。

「『そもそもさ』『僕はこれ以上ギーシュちゃんに辛く当たるつもりはないよ？』」

「はぁ？」

「え……」

ルイズが眉をひそめて、ギーシュがぽかんと口を開ける。この期に及んで何を言っているのだ。話の流れが全く理解出来ない。それ

でも、これもまた薄っぺらな嘘だとしたとて、ギーシュに小さな希望が灯ったのは事実だった。

「『僕の国では、全力で喧嘩した者同士はその後厚い友情で結ばれるのさ』『僕とギーシュちゃんは喧嘩どころか決闘をしたんだ』『これはもう友達どころじゃないでしょ』」

軽くルイズを押しのけて、禊が四つ這いのギーシュを見下ろして、握手を求めるように手を差し伸べる。自分が必死に求めて、誰も応えてくれなかったそれを与えてくれたのは禊だった。

「『さぁ僕の手を取って』『今日から僕達は無二の親友だよ!』」

羽より軽くて真実味がまるでない、悪魔としか思えない禊の笑顔。それがギーシュには、天使の微笑みと同じに見えた。

第十三敗『また勝てなかった』

禊がよく自らを指し示す言葉として使った過負荷（マイナス）とは何なのか、それはこの止まらない鳥肌と、心を濁す不快感がそのまま答えなのだろう。

禊が吸血鬼かもしれないと、少しでも思った自分が馬鹿だった。ましてやエルフだったらどうしようなんて思い違いも甚だしい。あいつはそれ以下だ。

球磨川禊とそれ以外では存在の意味が違う。

エルフは恐るべき種族だが、禊は最低な人間だ。

人間のままで人間から忌み嫌われる悪意の化身、その生き方こそが過負荷（マイナス）であり、過負荷（みそぎ）が使用している大嘘憑き（オールフィクション）はそれを増長させる一部だった。

だから禊は自分を過負荷（マイナス）と分類し、扱う力も同じく過負荷（マイナス）と称したのだろう。きっとこの二つは別てないのだ。

ルイズは禊と過負荷（マイナス）をそのように結論付けたが、長い理論と思考の果てにそうなったわけではない。球磨川禊に関わり、感覚的に本能が導いた回答だった。

そこまできてルイズが悟り導いた結論は、“こんなの自分の手には負えない”だ。

認めたくはないが、禊を召喚した自分にも過負荷（マイナス）の素養はあるのかもしれない。けれど禊が散布するこれは、ルイズ一人でどうこうできるものではなかった。

ルイズは決して禊を見くびっていたのではない。あまりに過負荷（みそぎ）がハルケギニアでは規格外の例外だったのだ。

それに気付かず観察なんて選んでしまったがために、決闘とは無関係だった生徒まで視力と声を無かったことにされるという、余計な被害が広がってしまった。

もうこれ以上の喪失は許されない。ギーシュだって、浮気した報

いとしてもここまで苛烈に受ける必要はないはずだ。もうこの決闘を止めよう、それが禊の主人である自分の務めだ。

戦いにならないという事実は、戦わない理由にはならい。敵に背中を見せないのが貴族なのだから。

そうしてルイズは背の後ろにギーシュを匿い、一度は禊の策略によって失いかけた貴族の誇りだけを武器にして、禊と対峙した。

――だというのに、何なのよ流れは！

皿の端へ押し退けられた添えもののパセリみたいにルイズは避けられてしまい、禊はこれ以上の非戦を宣言し、ギーシュに和解を持ちかけた。

これじゃまるで自分が相手にもされてない気分だし、事実されてないのだろう。手を伸ばし握手を求める禊と、その手を見つめ返すギーシュ。二人の世界はそこで完結していて、ルイズの入り込む余地はなかった。

そうして脇にどけられたからこそ、ルイズは気付いた。あのギーシュは部屋の中で独り自暴自棄になっていた自分と同じだということに。

自分の弱さを認めれば心は救われる。それはとても楽な選択で、気持ち悪いはずだった禊の誘う声が甘美にも思えてきて、抗い辛い魅力を宿していく。

昨日は運よくキュルケが助けてくれたからどうにかなったものの、あのままだったらルイズは今頃過負荷（マイナス）への道を進み始めていただろう。

ならここでルイズがすべきは、二人だけの閉じた世界をこじ開けて、ギーシュに自分の声を届けることだ。

「ギーシュ！　その手を握っちゃ駄目！」

言葉は時に人を追い詰め誤らせるが、正しき道を示して導く力も持っている。ルイズはそれを知った。

「あなたはグラモン家の貴族でしょ！　モンモランシーと一年生の子を助けるって言ってたじゃない」

ギーシュが歩むべき道は貴族の誇りある道だ。険しいけれど、二人の罪無き女の子を救おうとしていたギーシュは、確かにその道を歩いていた。ならば、まだやり直せるはずだ。

ギーシュは一人じゃない。共に支えあえる仲間がいる。それに気付けば過負荷にだって立ち向かえる。

「ギー……シュ……」

されど、ルイズの声なんてまるで聞こえてないように、ギーシュは禊の手をしっかりと掴んだ。ギーシュが選んだのは厳しく強い貴族の誇りではなく、過負荷（マイナス）の優しく冷たい闇だった。

●

見知らぬ闇で地を這う自分に、光が降り注ぐように舞い降りた螺子（きい）のない禊の右手。ギーシュにこれを抗えるはずがない。

――死にたくない！

ギーシュにあるのはこれだけだから。

ずっと底の見えない闇に堕ちていくような絶望で、そこに一本、蜘蛛の糸が垂らされたようなものだった。そこにどんな意図があろうとも、その優しさを信じるしかない。

――助かる。僕は生き残った！

開放を求めるギーシュの心は、無条件で禊を信じた。疑問や猜疑を心の隅に押しのけて、モンモランシーとケティの悲しむ顔が脳裏を霞めても、禊の手という絶対に抗う強さにはならない。

誰かの声が聞こえたような気がしたけど、まるでノイズみたいに耳障りなだけで、ギーシュの芯には響かなかった。

名を惜しむな、命を惜しめ。

掴む。ギーシュは生き残るために、禊という蜘蛛の糸を掴んだ。

「ああ……僕達は、今日から親友だ……」

自分はきっと、眉尻を下げて気の抜けた面構えをしているだろう。

それで構わない。何の問題があるというのだ。

だって禊は親友だから。
だって『僕は悪くない』から。
媚を売るように、へらへらとギーシュが笑う。それは、貴族（プラス）を捨てて、過負荷（マイナス）となった者の顔だった。
「『なーんて』『甘ぇよ』」
禊の空いている左手に握られていた螺子が、泣き笑うギーシュの額に迫る。禊という糸は、掴んだ瞬間ギーシュを切り離した。

●

ギーシュの心が過負荷（マイナス）に流され堕ちた。
ルイズはその顔から思わず目を逸らす。しかし、真の悲劇はそこからだった。
皆がこれで決闘は終わったと思った、これはそういう展開だ。そこで禊は自分を信じて手を取ったギーシュに、容赦なく螺子を突き立てた。
「あああああああ……」
ルイズから漏れ出す音は、言葉の意味を為さない。ルイズ自身も意図して喋ろうとしたわけじゃなくて、思わず悲鳴を上げようとしたが、気持ちが現実に付いていけなかったのだ。
禊がギーシュを殺した。
使い魔が人間を殺した。
受け止めきれない重責がルイズの心身を圧迫し、その場から一歩動くことさえ肉体が拒否する。
遠くで誰か倒れた。シエスタだった。
禊に懐いていた珍しいメイドだったから、まさかの貴族殺しに心がパンクしたのだろう。自分も同じく気絶できればよかったのに。
「『うお！』」
ルイズが立ち尽くしていても、時間は進む。横合いから、不可視の一撃が禊を叩き飛ばした。はっとしてルイズは何が起きたかを思

考し、周りを見回す。この魔法は『エアハンマー』で、使用したのはタバサだった。

　禊が弾かれて地面を転がり、タバサとキュルケがギーシュへ駆け寄る。できの悪い映画でも見ているようだ。

　これは全部ルイズが見ている架空のお話で、自分は観客。そうであって欲しいと願うルイズの足は、縫い付けられたようにここから動かない。

「『何も見えなかったぞ？』『今のが風系統の魔法かな』」

　この世界の魔法を分析しながら、禊が立ち上がる。『エアハンマー』が直撃した右の肘が逆方向に曲がり、だらんと下げた前屈気味のまま歩行し始めるが、どうせ本当はわざとやっているのだろう。

　そこへ、炎の追撃が禊の全身を包んだ。火だるまになった禊は体裁を捨て広場を転げまわる。

「『ぐあああ熱っ！　熱い！』『体が焼けてる！』」

　その容赦のない炎を操るのは火系統のメイジとして学院で有名なキュルケではない。むしろキュルケは炎を使ったメイジに驚いている側だった。禊を燃焼させたのは、私やタバサ達の反対側から現れた人物だ。

「これ以上生徒には手を出させませんぞ。ここからはわたしが相手です」

　いつもの冴えない風体からは想像できない冷徹な視線を向けたコルベールが、身悶えする禊を見下ろす。

　高ランクなメイジが一挙に禊の敵へと回り、禊は燃え盛る炎に焼かれている身だ。それでも、ルイズの絶望感は微塵も薄まらない。コルベールもそうなのだろう、禊への警戒を緩めず、ここにいる者達に手短な指示を飛ばす。

「ここはわたしに任せて負傷した生徒を保健室へ。他の生徒もすぐ避難しなさい」

　それにいち早く応じたタバサがすっと立ち上がり、ギーシュにレビテーションをかけて浮かせる。でもあの螺子を頭に突き立てられ

たギーシュは、もうとっくに手遅れじゃないか。
「ギーシュは生きてる」
「え……？」
そこでようやくわたしは無意識の内に見ないようにしていたギーシュを写した。
ギーシュは死んでいるどころか傷一つ負っておらず、衣服やマントが新品同然に戻っているだけでなく、手にしたままの薔薇の花弁まで最初の数になっている。
ただ、股を中心にズボンが湿っていて、彼の倒れていた場所には小さな水溜まりができていた。きっと螺子を突き刺される恐怖で失禁してしまったのだろう。どうしようもなく惨めな姿だが、それを笑う者などここにはいなかった。ルイズだって、ギーシュはよく戦ったと思う。
「『やだなあ、教師ぐるみの虐めだなんて』『週刊少年ジャンプじゃ規制間違いなしの描写だよ』」
黒い煙を立ち上らせる襤が俯せに寝そべったまま話している。全身大火傷は免れないはずなのに、両手で顔をぬぐうと健康的な肌が現れた。生徒ではなく教師が敵になっても、襤の態度は相変わらずだ。
「『そのジャンプがここにはないんだけどね』『あれを読めないと思うとテンション下がっちゃうよ』」
土でも風でも火でも、襤の過負荷（マイナス）は台無しにしてみせた。何度倒れても立ち上がる襤は、気高さはなく気持ち悪い。諦めない精神を見苦しいと思ったのは、これが初めてだった。
「『おっと』『僕に抵抗の意思はないよ』『ギーシュちゃんとの決闘は、彼の望みに応えただけなんだから』」
「ならば、あなたとミス・ヴァリエールには、このままわたしに同行してもらいます。よろしいですね」
「はい……」
「『僕も問題ありませんよ』『対戦相手のギーシュちゃんが気絶し

ちゃったから、決闘はこれまでだろうね』」

ギーシュが誇りを懸けたはずの決闘は誇りのない結末を迎え、残ったのは後味の悪さだけだ。禊の殺人だけは消えたが、禊がやったことが無かったことになったわけじゃない。嘘を取り憑かせて起こした事件は、どこにも消え去りはしないのだ。

ルイズは自分が主人として背負った罪状を思うと、ここで泣き喚きたくなったが、それは逃げているだけと自分を叱咤する。しかし、ルイズがギーシュの死を確信して、また逃げたという足枷が彼女に新たな縛めを与えていた。

そんな心情を、きっと禊は知っているだろう。きっとそれだって禊は計画に含めていたはずだ。

だけどそんなことはおくびにも出さず、決闘を行いに来た時と同じ足取りでコルベールの後ろに続いた。

そして歩きながら告げる。ギーシュが死んだと思った時と、同じだけの衝撃をルイズに与える言葉を。

「『また勝てなかった』」

禊はこれだけの事件を引き起こし、数えきれいない生徒達に消えないトラウマを植えつけて尚、決闘には勝っていなかった。

第十四敗『どうということもない』

トリステイン魔法学院の女子寮廊下を男女のペアが歩いていた。
意気消沈したルイズと定番の笑みを貼り付けた禊である。
ルイズと禊の両名は休校になった午後の授業時間を、学院の会議室で過ごすことになったのだった。
そこで待っていたのは、保険医を除く全教師からの質問責め、そして糾弾の数々だった。あの酷さは思い出しただけでも頭が痛くなる。主に禊の発言で。
ルイズは自室に戻りベッドへ腰かけ禊を床に正座させた。
「あーもう、本当にどうすればいいのよ、これ！」
ルイズが両手で頭皮をかきむしりながら、「わたしの人生終わりだわ」等次々に悲観的な言葉を吐き散らかす。
「『どうにもならないし、なるようにしかならないさ』」
「だから問題なんでしょうが！」
馬鹿なの？　馬鹿だわ！　馬鹿だから！　と三段階で禊を罵倒するが、禊にはノーダメージだ。
禊の出身地は、禊が勝手に東方の国出身の平民だと取り繕った。これは異世界人とか言われるよりは説得力があるのでよっぽどいい。
問題は決闘についてである。
ギーシュについてはあっちから仕掛けてきた決闘であり、話は和解で一応の決着で付いたため、学院長の判断により部外者が立ち入る話ではないとされた。
しかし、途中禊が視力と声帯を無かったことにした生徒については別だ。
あれは禊がいきなりギャラリーの貴族を襲ったという大問題なのだから。
またモンモランシーとケティも、記憶の改竄しているためにこれも同じく重罪だ。しかしこれについても禊はギーシュを通して話を

付けると言っていた。どうするつもりかは知らないが、禊による被害者の増加を防止するにはしっかりと見張っておかねばならない。

「どうして決闘の最中に、ギーシュ以外へ危害を加えたのよ」

「『それは取り調べでも言ったけど』『大嘘憑きの効果を証明するためだよ』」

そんな理由で貴族の人生を完膚なきまでに破壊しておいて、おとがめなしで済むわけがあるか。

「『僕の過負荷（マイナス）は取り返しが付かないからね』『派手に使っていきなりギーシュちゃんを再起不能にしちゃ、親友になれないでしょ』」

大嘘憑きで最も恐ろしいのは、その取り返しが付かない部分だった。

つまり一度無かったことにした事柄は再び無かったことにはできず、つまり元には戻せないのだ。

このルールに乗っ取るとならば、あのギャラリーにいた少年は、二度とは日の光を拝めない。これではもう学院にいる意味さえも無くなったのだから、彼は自主退学するしか道はないだろう。

犠牲となった生徒には申し訳がないし、戻せるものなら戻してあげたいが、そもそもにして方法がない。実行者である禊でさえ手の加えようがないのだから、詰んでいるとさえ思う。

「どうにもならないわよ、こんなの……」

「『じゃあこう言い換えよう』『どうにもならないし、どうということもない』」

禊は喧嘩を売っているのだろうか。

どうということはない、が該当するのは禊だけだ。禊なら何が起きても持ち前の過負荷（マイナス）で自分の窮地すら台無しにするのだろう。この男にはどんな脚本だって意味をなさない。

「なんとかできるものならしてみなさいよ。ただし、大嘘憑き（オールフィクション）は使わせないわ」

大嘘憑き（オールフィクション）を封じる方法なんてありはしないので脅しにすらなりはしないのだが、ルイズが常に禊へ付きまとってでも被害の拡大を防

ぐつもりであるのは本心だった。
「『僕の大嘘憑き（オールフィクション）がいくら最低（マイナス）だからって』『元々ないものを無かったことにはできないぜ？』」
「はぁ？　何の関係もなかった人間の人生を台無しにしておいて、まだ『僕は悪くない』って言いたいわけ？　貴族を馬鹿にするのもいい加減にしなさいよ！」
「『なんだ』『そんなことかい？』」
――そんなことですって？
人をいきなり奈落に突き落とすような行為でさえ、禊には“そんなこと”に過ぎないと言うのか。いや、過ぎないからこその過負荷（マイナス）なのだろう。
好きに勝手を行って、無責任にヘラヘラ笑う。
「『だってそれ』『どうせ無罪放免になるからね』」
「あんたまた……」
予め仕組んでいたのか。
過負荷（マイナス）を知らないルイズを、本人の気付かぬよう精神的に追い詰めたように。
あれだけ勇ましかったギーシュが、いつしか弱さで塗り固められていたように。
あの貴族も、狡猾に計算した上で壊していたんだ。
しかも恐らくはもう手遅れだ。大嘘憑き（オールフィクション）が必要ないと言い切って尚無罪放免になる理屈があるとしたら、その仕込みはもうとっくに終わっているのだろう。
「『ルイズちゃんの様子から察して言うけど』『僕は何もしていないよ』」
「それをわたしが信じると思うわけ？」
「『彼は所謂問題児でね』『悪戯に気に食わない平民を痛めつけて、学院から停学を言い渡されたりもしていたんだよ』」
「あの生徒が問題児だからって、あんたがやったことは何も変わらないわよ」

もしあの生徒が、罰せられて当然の立場だったとしても禊が裁く権利はない。それに、これまでも学院側から処罰を受けているのならば、それはもう決闘と同じく他人がとやかくいうことでもないだろう。

「『彼は貴族のステレオタイプなのさ』『平民を見下して自分の自尊心を満たしてた』『そしてそれは彼の実家も同じでね』」

ルイズはこれまでとは違う意味で驚嘆していた。禊が計算しての行動だったのは思った通りだったが、やり口はこれまでと大きく違っている。

「『そんなわけで』『天下の貴族様が使い魔の平民にいいようにやられましたー！』『なんて認めちゃうわけにはいかないのさ』」

「あんた、どこからそんな情報を……」

「『ここは外界から隔離され閉じられた学院（せかい）だぜ？』『自分の無能（ゼロ）がどれくらいの速さで学院中を駆け巡ったか思い出してごらんよ』」

学院という閉じられた世界では、あっという間に情報は伝達される。ここで一年以上生活してきたのだ。そんなのは禊に言われるまでもないし、問題はそこではない。

「誰かに聞くにも、あんたがクラスメートとまともに会話できるはずがないでしょ」

「『ルイズちゃんらしい貴族（プラス）視点だね』『この学院で噂好きなのは何も貴族だけとは限らないよ』」

禊がプラスと言う時は、限って上から目線で物を見ていることを指してきた。そして禊の目線はいつも下から見下すように不愉快なのだ。

プラスとマイナス。

幸福（プラス）と不幸（マイナス）。

そして、貴族（プラス）と平民（マイナス）。

――そうだ！　あの平民（メイド）！

ルイズの中で、禊の決闘にわざわざ引っ付いてきた彼女の存在が繋がった。シエスタとか言ったメイドが、禊と他の平民達を繋げて

いたのだ。その情報網を駆使して、禊は学園や生徒の情報を集めていたのか。ギーシュとケティの浮気だって、その筋から確証を得ていたのかもしれない。

「学院で働く平民から生徒の話を……！」

「『貴族は平民になら裸を見られても平気なくらい無関心なんでしょ？』『言い換えると』『平民の目線は、むしろ貴族の本心を覗くのに適してるとすら言えないかな』『僕の国では“家政婦は見た”なんてタイトルの物語があるくらいさ』」

「だからって、あの生徒が決闘を見に来て、それを都合よく見つけられるなんて限らないわ」

半ば自分の視野が狭かったというミスを指摘され、やけくそになったための返し文句だが、自分で言ってみて的外れではないと思った。

これまでの話だけでは計画が偶然に頼りすぎている。禊に直接誘導されたわけじゃないなら、あの生徒には昼休みをどう過ごすかの選択肢と自由な意思が残っていたはずだ。

「『そうかい？』『平民を嬲（なぶ）って喜ぶ根っからのサディストなら』『僕が合法的に虐められる決闘なんて最前席陣取ってかぶりつきで観戦すると思っていたよ』」

ギーシュは自分で決闘をするという宣言を広げて回っていたのはルイズも憶えている。それを耳に挟んだあの生徒は、嬉々として平民がいたぶられる姿を見るため、早めに観戦する準備を整え一番よく見える位置を確保していたのだ。まさか自分が狩られる側に回るなんて思いもせずに。

「そこまで計算してたって言うの？　だからこの後の展開も」

「『家族からもあれこれ言われたみたいだし』『よくて自主退学で引き籠り』『悪くても勘当されて目が見えなくて喋れない浮浪者になる程度かな』」

「貴族としての面子を守るため、向こうは泣き寝入りするってこと……？」

これはあり得る話だ。自身の中身より家柄を大事にするような貴族なら珍しくもない話で、そういう貴族が年々増えているのはルイズだって知っている。

どちらにしても彼の人生は、もう取り返しがつかなくて終わっていた。手の施しようがない最低（マイナス）だ。

そういう意味では、不幸（マイナス）に堕とされたのだ。

ギーシュと同じく、台無しにされ堕とされたのだ。

「何がしたいのよ、あんたは」

何がしたくて、他人にこんな仕打ちをするのかがわからなくて、わからないから怖い。澄みきったあの笑顔が気持ち悪かった。

「『幼い子供ってさ』『よく蟻とか小さな虫を潰したがるよね』」

「ミソギの言ってる幼い子供が、貴族と同じだって言いたいの？」

「『僕は』『幼い子供に踏み潰される小さな虫達の気持ちを、君達にわかって欲しいだけなのかもしれないね』」

「そんなの一方的よ！」

貴族達が幼い子供だなんて偏見と間違いだ。少なくとも、平民と貴族にある格差にはれっきとした理由がある。

「貴族は魔法によって平民にはできないことをやって、その恩恵で平民達を守ってきたわ。平民が貴族に税金を払ったり、雇われて働くのはその代償よ」

暮らしや身分の差があるのはいつだって貴族が前に出て、世界を引っ張ってきたからだ。より優れた力を持つ者が、持たざる者を守る。そうやってハルケギニアは反映してきた。

「そりゃああんたが言うみたいに、私利私欲のために他人を傷付ける貴族だって中にはいるけど、それは法に則って裁かれるべきだわ」

禊みたいに自分の理屈だけで貴族を嫌い貶めていたら、国は成り立たない。だから今禊は学院中から危険視され忌み嫌われているのだ。

「『それが“持つ者”の世界観なんだろうね』」

世界。

ルイズはもう禊が異世界人であるという言葉を、あまり疑っていなかった。それくらいルイズと禊の世界には大きく致命的なズレがあるのだ。

二人の世界は埋まらないし、埋められない。また埋めたいとも思わない。

たとえ魔法が使えなくとも、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは貴族（プラス）の世界の人間だった。

誰より貴族（プラス）であることに誇りを持った人間だった。

●

平穏で退屈なトリステイン魔法学院の学院長室で、秘書へのセクハラに精を出すオスマンに急な報せを持ってきたのはコルベールだった。

かつては偉大なメイジと讃えられ学院長の座に付いているものの、今は色ボケジジイでその名を馳せているオスマンだが、コルベールの持ってきた書物と一枚のスケッチを見てその表情が一変した。

鋭い眼光で秘書のロングビルに退室を命じ、コルベールに詳しく説明するんじゃと話の詳細を促す。

これまで魔法を成功したことがなかった生徒が召喚した平民の使い魔。そんな彼に刻まれた見たこともないルーンに、学者としての知的好奇心を刺激されたコルベールは様々な書物を漁った末、最後に辿り着いたのが始祖ブリミルについての文献だった。

始祖ブリミルとはまさしく神にも等しい、偉人として敬われている伝説のメイジでありハルケギニアにおいて知らぬ者はほぼいないだろう。

そして世界最高峰のメイジが引き連れていた使い魔のルーンこそが、ルイズの使い魔に刻まれていたものと同じだったのだ。

その名は『神の左手ガンダールヴ』。

学者肌で、いつも周りに理解されない研究に精を出す変わり者の

コルベールだったが、とんでもないものを見つけてきた。それこそ場合によってはトリステインを覆しかねない大発見である。

時代を塗り替えるかもしれない力を持ち、また一歩扱いを間違えれば同時に大惨事にも繋がりかねない情報だ。まずはその真偽を確かめねばなるまい。

これがただ偶然の一致だったならばそれでよし。もし、本当に……。

さてどうしたものかと思案していた時、扉のノック音が聞こえてきた。そして部屋に戻ってきたロングビルが、ヴェストリ広場にて決闘が行われていることを告げた。

決闘者はギーシュとたった今話題になっている件の使い魔。

教師達は決闘を止めるため『眠りの鐘』の使用を求めているようだが、オスマンはそれを突っぱね、再び去っていくロングビルを見送った。

暇な貴族は碌なものではないと思うが、これは絶好の機会である。

オスマンが杖を振ると、部屋にかけられていた大鏡にヴェストリ広場の様子が映し出された。

そこに映っているのは、決闘を観戦する多くの貴族達、その中心で杖を操りゴーレムに司令を出すギーシュ、そして槍で背を貫かれ地面に横たわりさらなる暴行を受けている使い魔の姿。

数分見続けても、その状況に変わりはない。

なんだ、やはり偶然の一致だったか。それよりいくら決闘とは言えこれはやり過ぎだ。仕方ないから『眠りの鐘』の使用許可を出すか。などと思っていたオスマンは、すぐその両目を見開くことになった。

ただしそれは『神の左手ガンダールヴ』の文献とは遠くかけ離れた、全く別次元の力によってだが。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3355x/

過負荷（マイナス）の使い魔

2011年12月18日00時48分発行